

続けるヒント

地域文化の未来を考える研究会・編

続ける
ヒント

豊かな地域文化を未来につなげるために、
今、私たちにできること。



地域文化の未来を考える研究会・編

公益財団法人サントリー文化財団

続けるヒント

地域文化の未来を考える研究会・編

目 次

はじめに	05
■ 地域文化は異なるもの味なもの 地域文化の未来を考える研究会顧問 御厨貴（談）	05
続けるヒント ― 提言 ―	
■ 岐路に立つ地域文化活動	15
■ 活動を棚おろしする	21
■ 仕切りをはずしてみたら	35
■ ゆるやかにつながる	49
■ まわりに流されない	65
■ 楽しむことが原点	77





地域文化は異なるもの
味なもの

地域文化の未来を考える研究会顧問
御厨 貴（談）

私が地域文化に関わりを持つようになって、ほぼ四半世紀になります。ただ、自分自身がこれを研究対象にしているとか、あるいは地域文化が専門になりますということは一度も言ったことがありません。だからこそずっと続けてこられたともいえます。では、私にとって地域文化とは何であったのか。それは趣味でもなければ、好奇心でも、単なる面白がりでもありません。

もちろんそういう要素は十分にあるのですよ。しかし私にとって地域文化というのは、現場があつて、その現場に私がどう関わるかという、その主体性の度合いがポイントなのです。それ以外はおそらく全く意味がないものだと思つていました。

ですから私にとって地域文化は、「お勉強もの」では全くありませんでした。これは面白くなりそうだしという気分があつて、初めてそこに地域文化が浮かびあがつてくる。面白くないもの、つまらないもの、努力して頑張っているから認めてくださいと言っているようなものには、全く関心を持たなかつ

たと思います。

いくつもの地域文化に接してきて、そのなかでも何が一番気持ちに触れ合うものだったかといわれると、私はYOSAKOIソーラン祭りを挙げたいと思います。YOSAKOIソーラン祭りというのは、たまたま高知でよさこい祭りに出会った北海道大学のひとりの学生が、これを札幌でやりたいと突然おもいついて、高知のよさこい祭りと、北海道のソーラン節を合体させたお祭りです。

単に合体させただけではなく、祭りとしてさらに独特なものに仕上げていったのが特徴で、審査員をつけたら、さまざまな仕掛けを考へて、観る面白さと競う面白さを付加価値としてつけ加えていきました。だからどんな毎年参加者が増えていったわけです。まさに平成の時代の地域文化そのものです。

今思うと、YOSAKOIソーラン祭りからは、考えられないくらいスピードでさまざまなアイデアが出ていました。札幌の南北の大通りとそれに挟まれた大通り公園でやっているのですが、そのため

に行政や警察と真正面からぶつかるわけです。どこかの祭りでもそうですが、行政や警察は常に文化創造の場面で大きく立ちはだかつてくる存在で、どうぞご自由にやってくださいなどとは決して言わない。だから行政と警察とは当初からかなりの緊張関係があつたと思いますが、YOSAKOIソーラン祭りをやってきた連中は、かなり大胆な発想でそれを乗り越えていきます。

そもそも北海道にYOSAKOIソーラン祭りが生まれる土壌は全くありませんでした。そこに他所から持ってきた種を蒔いて、芽を出させ、すごいスピードで育てていった。このスピード感があつたからこそ、伸びたのだと思います。祭りが急速に大きくなって、そしてあつという間にこれは北海道の祭りだと思われるようになりました。だからもうあれをやめようと言う人はいないでしょう。これが私はこの祭りの一番すばらしいところだと思います。

しかも今では北海道以外のところでも、この祭りが広がっています。祭りがひとつの原動力となつて、



まちを元気にしているのです。ある種の文化がそこに生まれることによって、若者と中年、あるいは年寄りを結んでいく。連動性が生まれる。もちろん、実際現地に行ってみるとなかなかいろいろな問題があるのですが、それでもやはりそれを乗り越えていく地域の底力を生み出している。北海道というのは昔、昭和新山が突然できたりしたところですが、同じようにYOSAKOIソーラン祭りという活火山がぽつと生まれたのですよ。これが面白い。何も歴史がないところに、爆発的な力でひとつの文化が生まれたということに今でも感動を覚えています。

もうひとつ面白いと思っているのは、あの祭りを生み出した中心人物である北大の学生が、いつまでもその祭りにしがみつかなかったこと。もちろん本人はずいぶん迷ったことがあると思いますが、そこから今度は全然別の政治の世界に転じていったのです。そしてYOSAKOIソーラン祭りを北海道各地でやってきた仲間たちと、政治のうえでも連携しながら何かやろうとしていました。祭りをやってい



たときと同じ精神なのだと思いますが、これもおそらくまた、北海道が生んだ地域文化のひとつの形だという気がします。これからどうなっていくのか、私としてはずっと眺めていきたいと思っています。

そんななかで私自身が実際に関わって、今まさに芽を出しつつあるひとつの地域文化活動について、次に申しあげたいと思います。平成も二十年ほどたった頃、自分が住んでいる東京ではなかなか地域の文化に関わるのは難しいと感じていました。ところが、あるとき、話は京都からやってきました。たまたま私の息子が京都の造形大学に通っていたのです。しかも演劇に魅せられて、俳優をやったり演出をやったり、そのほかにも色々なアートの活動に関わっていました。

親ですからそれを観に行く機会が結構あり、京大の西部講堂とか、今はもうなくなったのですが、立誠小学校、それにアトリエ劇研などに行きました。京都にはいくつもの小さな劇場とでもいうような、演劇をやらせてくれる場所があるのです。ところが、

近年になるとそういうところが続けられなくなってきた。オーナーのおじいさんたちが亡くなったり、あるいはその土地を買い上げようという動きが出てきたり。京都の小劇場演劇自体が潰れそうになってきたのです。これは大変な危機です。

京都では昔から学生演劇が盛んで、そのままずっと京都で続けていく人もあれば、そこから全国区になっていく人たちもたくさんいます。京都はそういう意味でいうと、小劇場演劇の中心地でもあった。そういった小劇場演劇の拠点である劇場が次々になくなっていくという問題に直面して、若い演出家であり俳優でもあるあごうさとしという人と、ルームシアターの支配人をやっていた蔭山陽太という二人が私のところにやってきたのです。そして、小劇場をつくりたいから、協力をしてくれと。私は京都に生まれ育ったわけでもないし、息子の活動の縁でしかない。しかも京都というのはなんとなく余所者を排除するものすごい力があるところですから、私に何ができるのかと思ったのですが、最終的には呼び

かけ人代表を引き受け協力することになりました。

京都の東九条に「Theatre E9 Kyoto」という名前の劇場をつくらうという話です。狂言の茂山あきらとか、今ではかなり世界的に有名な、トレーラーハウスを走らせているやなぎみわとか、そういう人たちも立ちあがるということで、その一端に入って私も協力することになったのです。何はともあれ先立つものが必要だ。資金ですよ。支援してくれそうなところを紹介しましたが、それくらいで足りるものではありません。最終的には、クラウドファンディングをやりました。私は東京で大(?)宣伝をしました。特に世田谷の私の家の周辺で。京都の東九条といっても何も分からず、京都の小劇場演劇といっても何も関心がなかった連中に、いいからこれに協力しなさいと言ったわけです。その結果、結構協力をしてくれる人たちが出てきた。一番面白かったのは、自宅で私のつれあいがバザーをやったときです。バザーの旗印は「京都のE9劇場」。みんな最初はE9がなんだか分からなかったけれど、いつか京都

に行くときの励みになるからとか言って、喜んで協力してくれました。

実は、イーストナイン、京都の東九条という地域は、知る人ぞ知る色々大変な地域なのです。戦前からさまざまな問題があって、今日に至るまで再開発ができなかった。それをなんとか解決しようという動きがはじめていると私は感じています。行政のほうでも京都市が中心となって動き出しています。京都市立芸術大学をイーストナインの近くの京都駅の東側に動かすというプランができあがり、いよいよあの地域を活性化させる要素が具体的に出てきました。もちろん芸大が移っただけ、シアターE9ができただけではダメですが、それが突破口になって、再開発が始まり、飲み食いをする場所やエンターテインメントを可能とする場所ができてくると、アートの街として変身をとげていくかもしれません。新しい文化の力を使いながら地域が変わっていく姿をぜひみたいと思って、この三年間支援活動を続けてきました。

この劇場は一億円以上の金が必要としていたので、まだ何千万か足りない状態だと聞きましたが、それでもクラウドファンディングやいくつかの企業からの応援もあり、借入金も使って、なんとかこの六月に劇場がオープンするところまでこぎつけました。ここからは中身の問題です。それは、京都の学生劇団、あるいは学生を卒業した小劇場演劇の連中が頑張らなくてはいけない、ということ。百人の観客を連日動員しなければならないのです。さらにはそれだけではなくて、あの地域に住んでいる方々の文化もそのなかで反映させていかななくてはなりません。先日のオープニングのレセプションで、「ハンマダン」という地域の打楽器グループの方々が演奏をしてくれました。本当に感動しました。演劇の連中は涙もろいから、泣いている人もたくさんいました。でも、こういう感動がもつと生まれてくればすばらしいと思うのです。あの地域は戦前からいろいろな対立があったところですから、すぐに丸くおさまるとは思いませんが、これをきっかけに、地域の力と

して文化をさらに発展させていくことはできるのではないかと期待しています。また、将来、E9で活動している連中が、東京にさらに世界に出ていく。あるいは世界や東京から、E9でやってみたいといつて人々がやってくる。そういう状況になったら、本当の意味での地域文化交流が成り立つだろうと思っています。

貧者の一灯ではありますが、私としては、北海道のYOSAKOIソーラン祭りに感動して以来、何かやりたいと思っていたわけです。そして二十余年たったつてから関わった劇場が、やっとこけら落としまでたどり着きました。すごく楽しかった。もちろん全部持ち出しですが、だからこそ楽しいんです。東京と京都を意外なかたちで結んでしまうことも面白かった。E9のためのバザーは今年の秋もまた我が家でやろうと思っています。そんなことをやりながら地域の文化をひらいていくことに、多少なりともこれからも貢献していくことができればと考えています。四半世紀前にサントリー文化財団に声をか

けられて、地域文化に関わり始めたときは、正直
言ってよく分からなかったのですが、最初に感動し
たものに導かれて、今、なんとなく自分らしい形に
なってきたのかなと思っている次第です。

ですから、地域文化活動にたずさわっている皆様
には、その最初の感動を大事にしてと言いたい。

First Impression is Best!

そこから、地域の何かしらうごめいているものに
声かけをしていく。あるいは声かけをされていく。
そのときに大切なのは、ひるまないことです。あと
ずさりしないことです。一歩前に踏み出す。えら
そーなことを言わない。まずはとけこんじゃうこと
です。理屈はきつとあとからついてきます。時間は
かかるかもしれませんが、でもそれは絶対に、その人
を大きな存在にかえてくれます。令和の地域文化の
担い手に、ほら、臆することなく、なりましょう。
楽しみも苦勞もいっしょに背負い込みながら。

御厨貴（談）

地域文化の未来を考える研究会顧問
Theatre E9 Kyoto 顧問
東京大学名誉教授



p13 p08 p07 p05
現代版組踊「肝高の阿麻和利」(撮影・桑田瑞穂)
YOSAKOIソーラン祭り(撮影・鈴木勝)
昭和新年国際雪合戦決勝戦
ゆふいん文化・記録映画祭懇親会(撮影・鈴木勝)

岐路に立つ地域文化活動

全国各地で展開されている地域文化活動には、人口減少や社会情勢の変化に伴い活動が難しくなる例も出てきた。そのなかで、当事者は、活動を続けるために知恵を絞っている。そこで、地域文化活動の当事者が、ほかの団体の工夫を共有することで、それぞれの活動をさらに発展させるべく提言をまとめた。各地で活動する担い手にとって、どこかに役に立つヒントがあればと願っている。また、地域文化に関心のある人々にとっても、参考になるように構成してみた。





多様な地域文化が地域をつくる

地域文化が地域をつくる。その地域文化活動には、さまざまな活動がある。昔からの祭りを工夫しながら続けて、季節感と住民の絆を確認し合う活動がある。仲間と始めた新たな催しや芸術活動が地域の人々を巻き込んで、すっかり地域の行事となった活動もある。音楽や演劇など、地域を拠点として自分たちが好きな芸術活動を展開するうち、地域になくてはならない存在にまで成長した活動もある。あるいは、地域のことを深く

知りたい、地域の食文化を大切にしたいといった動機から始めた活動が長く続くうち、地域の宝を守る原動力になっている例もある。自分たちが誇る町並みがくずれていくことに危機感を覚え、古い建物を残す運動を展開するうちに、まちをにぎやかにする行事に広がっていったという活動もある。

にぎやかに歌って踊る活動もあれば、仲間同士で静かに展開する活動もある。観光客を数多く集める地元にとってハレの祭りになった活動もあれば、知る人ぞ知る存

在ながら地元の人々にとっては季節の風物詩となったものもある。そうした活動の中核には、何の得にもならないけれど、地元の仲間と一緒に楽しむのが忘れられず、苦しい準備を重ねて活動が続けるという精神がある。

地域文化と草の根のエネルギー

盛んな地域文化活動には、草の根のエネルギーや知恵のエッセンスが詰まっている。こうした活動のリーダーといえば、声が大きくはつきりものを言うけれども、どこことなく愛嬌があつて人を惹きつけ、まわりを巻き込んで活動を大きくしてきたような人が多い。また、一見静かながら、こころざしを内に秘めた魅力で、まわりの人

が手伝わざるを得なくなるような力を持つ人もいる。いずれにせよ、地域文化活動の中心人物には、それぞれ独特の魅力があり、勢いのある活動には、あらがいがたい吸引力がある。こうした人々がいるからこそ、地域の暮らしに彩りが添えられるのである。地域文化活動に接していると、日本もまだまだいけるのではないかという気になってくる。

人口減少の脅威

ところが、超高齢社会を迎えた日本では、消滅の危機に直面する地域も増えている。この人口減少問題は都市地域にも及んできて、都市や郊外も同様の問題に直面しつつある。今や日本全体の人口減

少や少子化・高齢化は、避けがたいものとなった。こうした人口変動は、政治や経済などはもちろん、日常生活に直接的な影響を与え、社会のあらゆる面を変えていく。かつて地域を支えていた環境が変わることで、昔と同じような活動が難しくなる例が少なくない。

社会の変化により活動が難しくなる

子どもが主役の地域文化活動では、地元子どもがいなくなることで、そのままの形では存続できなくなっている。かつては地元の誇りだということで、地元自治体から物心両面にわたる手厚い支援があった活動が、財政難でなかなか資金援助も十分ではなくなるばかりか、役場職員も人手不足で手



伝いができないという現象も各地で起こっている。地場産業があつてこそその活動も、それが衰退すれば実質的な担い手がなくなる。こうした社会の変化によって地域文化活動が存続できなくなる可能

性は、各地で見られる。実際に、長く続く活動から将来の不安について聞く機会が増え、現に活動を縮小せざるを得ないところも少なからず出てきた。それどころか、表面上は隆盛をきわめているよう

にみえる活動の関係者から、秘められた悩みを聞くこともある。

地域文化活動の危機

長い歴史を持つ祭りや伝統芸能、年中行事がなくなってしまうのは、まことに忍びない。ふるさとに帰れば毎年やっているはずの祭りが、いつしか途絶えるというのは、日本人の心が失われるような痛みを伴う。また、昭和から平成にかけて生まれた文化活動が、近い将来に廃絶してしまうのは、本当に残念なことである。なんとかして続ける手立てがないか、どうしたら続くのかというのは、関係者のみならず、多くの日本人の心配事でもある。

もっとも原因が構造的なもので

あるから、ただ押しとどめようとするだけでは衰退を回避することはできないし、まして懐旧的な気分浸るだけでは、問題を悪化させるだけである。祭りを楽しんでいる観客が、とにかく続けてほしいと願うだけでは、運営を担っている関係者は持ちこたえられない可能性もある。どうかして、こうした活動が続いていく道筋を描けないだろうか。

危機を乗り越えてきた

ただ、よく考えれば、これまでも危機はあった。日本全国が高度経済成長にわたった時代は、過疎と過密が問題になった時代でもあり、農山漁村では、急激な人口減少と産業構造の変化にさらされて

いた。それ以前にも、戦争による荒廃や、明治維新や文明開化による変革というような時代もあった。長く続いている地域文化活動には、それぞれの場面で、幾多の危機を乗り越えてきたものも少なくないし、地域衰退への危機感から始まった活動例も多いのである。

当事者の知恵と工夫

このとき、地域の現場で文化活動を担っている人々は、危機を体感しているだけに、さまざまな知恵や工夫によって、危機に備えつつあるようにもみえる。苦しいけれども、なんとか続けられるように、いろいろな手を打っているという話を聞くことも多い。たとえば、地元の子どもが少なくなった

ため、都会の子どもを呼んできて、祭りに出てもらっているうちに、地域のつながりが強くなって、過疎で悩む村を応援する都会人が増えてきた。それによって祭り自体の存続は心配なくなったという例もある。このほかにもおもしろい切っけ、活動の主体を若がえらせることで、柔軟に時代に対応しようとしている活動もある。

そもそも、地域活動の中核メンバーは、地域社会の担い手でもあり、人前で大きな声で話ができるというだけではなく、社会のさまざまな面に目配りがきく人々でもある。そうした人々は、ほかの地域との交流も進め、自分なりの工夫を繰り返して活動が続いている。その知恵を広く共有することに、

地域文化活動の未来をひらく鍵があるように見える。

存続についての対処法

そこで、地域文化活動の存続にとって何が問題となっているのか、現場ではどのような努力がなされているのか、優れたリーダーはどのような展望を持っているのか、全国の地域文化活動の現場に学び、地域文化の存続・発展にとって何が必要なのかを勉強してみることにした。地域文化の未来を考える研究会は、限られた期間ではあったが、地域文化活動を展開している皆様を訪ね、存続の秘訣について教えを受けてきた。

その結果分かったことは、地域文化活動はきわめて多様で、ひと

つの処方箋ではとても足りないが、種類の違う活動を通じて一定の対処策があることだった。そこで、現場の皆様から教えていただいた知恵を自分たちで練り直したのが、この冊子である。提言とはいっても、の、何らかの気づきの機会となるように、いくつかのヒントを書き連ねたものにすぎないが、どこかに共感の輪が広がればというおもいでまとめた。この提言が、同じ悩みを抱える人々にとって、悩みを人と共有し、それを乗り越えるきっかけになれば幸いである。

p18 p16
17 一万人のエイサー踊り隊（撮影・鈴木勝）
遠野物語ファンタジー出演者（撮影・浦田穂二）

多様な地域文化の花咲く日本。環境変化を乗り越え、人手や資金不足にめげず、活動の引き継ぎも順調に行いたい。無理なく健やかに活動が続ける団体に目を向けると、ある工夫の実践に気がつく。それは活動の根幹や取り組み、役割分担を見直す、すなわち活動の棚おろしである。これが活動の課題解決や楽しさを磨く手法や協力相手を見出すのに役立つ。ここでは、さまざまな事例を通じて、棚おろしの妙や考え方を解き明かしていこう。

活動を棚おろしする



成長の罅

地域文化活動を重ねていくうちに「自分たちの楽しみ」が地域皆の楽しみとなり、さらに地域外の人々を惹きつけ、まちににぎわいを生む。いつしか周囲の期待は高まり、自分たちの手に負えないほどその取り組みは大きくなっていく。あつちと折衝、こっちに頼みごと。地域に同様の活動が増える、違いを出そうと背伸びをし、実力以上に内容も盛り込みがちに

なるのも人の常。こうなると活動

を続けるだけで大変である。環境が変わっても広げすぎた活動を剪定できず、疲弊していく団体は数知れない。そこで、雲行きがあやしいと感じたら、次のことを振り返ってはどうかだろうか。自分たちでできる運営業務と力足らずな運営業務、メンバーで分担できる無理のない活動の循環、なかでも活動の根幹、つまり自分たちしかできないことだろう。

活動を楽しめてこそ

活動の根幹をはっきりさせるためにはどうしたらいいのだろうか。「まちおこしじゃなくて、好きだからこそやってこられたんです」。この発言にまずヒントがあるように思う。こう語った方が関わる音楽祭では、全国から音楽好きが集い、昼夜を通して楽器を奏で、まちにひとときのにぎわいをもたらしている。祭りの始まりを彩るパレードでは、まちのお母さんたちがおもいおもいに着飾り、活き活きと身体を揺らして踊っている。その一方で、出場順番の割り振り、会場の手配などで事務作業が大きな負担となった。「無理をするのはよそう。運営を担うメンバーが大好きな音楽を楽しめなくなった

ら意味がない」。運営メンバーの疲労が色濃くなるなかで、出場制限や出演料の徴収により、音楽祭の規模を制限した。初心に立ち返る。この事例のように、取り組みが「楽しい」かどうかで、活動の根幹を見直す方法もある。

健やかさを自問する

ワークライフバランス（仕事と生活の調和）から活動をとらえ直すという手もある。地域でいち早く市民楽団を立ち上げ、音楽への関心を高めてきたある楽団。その中核メンバーから磨き上げてきた運営方針を聞いた。「仕事も家庭も疎かにしない。そのうえで、プロに聴かせても恥ずかしくない演奏水準でありたい」。音楽の裾野

を広げてきたなかで、地域に楽団も増えてきた。自分たちが健やかに楽しめ、かつ地域から支持され続ける楽団であるためにはどうあるべきか。メンバーで自問自答を繰り返し、現状にあった方針を見出したという。

伝統も変えられる

「祭りや伝統芸能の分野では、活動を見直すことはなかなか難しい」という話が聞かれる。確かに「伝統は変えてはならない」という社会通念が根強い。ところが、各地に目を向けると、環境が変わったら伝統も変わるのは当然と、変革を自然に受け入れる地域も少なくない。一様に文化をつないできた先人たちも、環境の変わり目

には中身や運営の仕方を変革させてきたという。地元の郷土史家、学芸員、大学の研究者に話を聞いてみてはどうだろうか。もしかすると江戸時代の方が、今よりも柔軟に変化を受け入れて、芸能や祭りの形を幾度となく変えてきたかもしれない。祭りの根幹が日々の生活への感謝、神仏や祖先への敬意、地域の活力や親睦の醸成にあるならば、取りはずしてもよい型があるようにおもわれる。実際に、宗教的色彩が強い祭りでさえ、禁忌とされてきた女性や外国人の参加を許容し始めている。

道具を見直す

伝統と新技術の融合も進みつつある。伝統工芸の素材調達や技能



継承が成り立たなくなれば、使っている道具を切り替えることも考えられる。道具の目立たない箇所は、より使い勝手のいい素材で対応する事例も見受けられる。ある人形芝居では、長きにわたり人形

遣いは男性が担ってきた。農業で鍛えた身体を使い、躍動感を持って人形を動かすのが魅力であった。しかしメンバーの高齢化、女性の参加に伴い、重量のある人形の扱いが課題となったという。そこで人形の衣装を軽量化することで、その課題に応じたわけである。「安易に演目や登場人物を削るのは避けたいんです」。運営メンバーの女性のおもいである。次の世代につなぎたい根幹が、新たな素材や技術との出逢いをひらいていく。

情報技術で技をつなぐ

技の継承の方式も口伝から新技術との融合へと変わりつつある。ある伝統芸能は大学との連携によ

り踊りの動きを細かく撮影し、映像として繰り返し確認できるようにしているという。これによって時間と空間の懸隔を超えた育成を行うことができている。若手にとっては手慣れたスマホやタブレット端末でそれを何度もみることでできるので、修得も意外に早いようだ。

不易流行

そうやって基本を身につけると、なかには芸に独創性を発揮しようとする踊り手も出てくる。「そんなときは『やりたいようにやってみろ』と背中を押します。何より踊り手としての充実感を持つてもらいたい」。踊りの師匠はためらわず言う。基本の型というものは

あるし、踊らないと消えてしまう芸も大切だが、そのうえで若手の主体性を尊重する。「世阿弥も言っていましたよね。今日やる芸と明日の芸は違うと」。伝統を重んじるからこそ、先を見据えて変化を受容する。このように伝統芸能にあっても、不易流行の観点から行事の内容、振り付け、道具、活動の頻度、運営業務などを見直すに至っている。

活動が重くなる

現代人は多忙である。特に地域文化活動の運営を担う主なメンバーとされてきた三十から四十代は、仕事に育児にと、趣味や地域活動に手が回らなくなりつつある。地域文化活動に尻込みする理由は、



活動の棚おろし

こういった躊躇や徒労感を和らげるためにも、活動の定期的な見直し、すなわち棚おろしが欠かせない。棚おろしとは、もともと商店などで決算を前に商品在庫などの実物を確認し、記録を付けることであり、その後、幅広く業務内容について、全般的に検査・確認するという意味で使われている。地域文化活動であれば、自分たちがしたいこと、自分たちができること、社会から求められていることを書き出してみてはどうだろう。それら三つの観点から折り合いがつけられる範囲に、取り組みを絞っていくのである。

よその活動の聞き取りをするのも一考である。実際、その地域文

活動の全容が見えないことにあるのではないだろうか。「仕事や育児をしながら続けられるだろうか」「中途半端に関わって、心証が悪くなってしまったら...」。地域コミュニティとの関わりが深い地域文化活動ほど、人々が後ろ向きになるのは否めない。さらに、運営業務の現場では疲れも見受けられる。創業期を体験してきたメンバーは、まだ乗り越えられるかもしれない。苦しいなかで活動を形にしてきた充実感、喜びを何度も体験しているのだから。しかし第二世代以降となるとそうはいかない。『ああはできない』と、中核メンバーとなることをためらう若手が増えてきた」と、憂う声の方々から聞かれる。

化活動を体験、鑑賞をしたうえで話を伺うと、適正な規模や開催頻度に関わるイメージが明確になるだろう。よその団体に自分たちの文化活動を視察してもらい、自分たちの活動のあり様を確認する機会とするのもよい。活動によって同じような悩みを抱えており、学会や交流会のような形で定期的に集まる文化活動のコミュニティになっていった例もあるという。その場で活動の内容を報告し合い、アイデアやノウハウを得たり、活動への意欲を高めている。

無理のない活動のあり方

よその団体との交流や活動の棚おろしを経ると、自分たちに無理のない身の中、手の中での活動の

あり方が見えてくる。イベント規模を縮小したり、時期を分散させて開催した方が無理なく、皆が楽しんで取り組めることに気づくかもしれない。メンバーが仕事や家庭を持ちながら練習や稽古を続けるにはどうすべきか。軌道に乗せている団体への視察、対話は自らの活動の循環を考え直し、通年の無理のない活動計画をつくるうえで示唆に富むだろう。現に棚おろしの過程を経て、計画的に活動を続ける団体も見受けられるようになってきた。

計画の視覚化

演劇を四十年以上続けるある文化活動では、「地域に根ざした古くて新しいもの」を将来に引き継

いでいくために、中期計画を立て担当ごとに運営をしている。計画では事業の到達点を定め、脚本・演出、キャスト、舞台、美術、音楽、衣装といったチームごとに担当者を決め、作業計画を進行表のように視覚化し、進捗状況を共有しているという。計画の立案にあたっては、現状の分析（新しいものの、古いもの、今後も必要なもの、変えるべきものの）、目標設定（中間も含む）、目標に向かって必要なアクション（研修・視察など）の設定をチームごとに行ったそうである。

目指す姿の共有

目標設定で避けたいのは、厳密な数値管理である。それは地域文

化活動とは相いれず、活動の楽しみを奪うだけである。場合によっては補助金や組織体の関係で、そうはいってられない場合もあるだろう。けれども活動の本旨から言えば、地域文化活動における計画管理の様式は目標管理よりも、目指す姿がメンバー間で共有できているかに比重を置いた方がよい。

人手や資金で困らないために

地域文化活動にのしかかる重い課題が資金不足である。地域文化

は人々の自発的な活動によって支えられており、運営に必要な資源に恵まれているとはいえない。最近では自治体の文化予算、企業からの寄附金削減も著しく、文化活動の懐事情は芳しくない。しかし、寄附や補助金を引き寄せる文化活動もある。その多くは活動の棚おろしを経て、活動の基本的な価値観や方向性を明確にしている。それによって活動に揺らぎが出ず、補助金も安心して付けやすいという。活動の価値観と企業理念や事

業活動に親和性があれば、企業も寄附をしやすい。もちろん、寄附がほしいからと、すり寄るようなことは本末転倒である。活動の基本的な価値観や方向性が定まると、資金の調達や使い方の意識も変わってくる。「赤字を出さない。借金をしない。ひとつのところに財源を頼らない」。ある劇団はこういう原則を立てて、半世紀以上も活動を持続させている。

棚おろしからみつける協力相手

棚おろしによって、外部委託可能な業務がみつかるかもしれない。これにより、近隣の文化団体同士お互いに融通できる役割があれば、費用の削減につながる。具体的には「地域のなか

で誰が何をしているのか」を棚おろしするのがいい。たとえばパレードやフェスティバルの場合、にぎわいが生まれメンバーやまちなも活気づくものの、人手がかかるのが玉に瑕である。警備、救護、音響設備、通訳など当日の運営だけでも必要となる役割は多岐にわたる。それに紐づけて棚おろしをしてみると、医師会、青年会議所、工務店、大学のサークル、楽器製造・小売業者、シニアボランティア、参加者などから数々の助っ人をみつけることができる。あらかじめ支援者・団体候補を選定しておくこともよいだろう。



基本的な価値を際立たせて 縁を広げる

ここで前提になるのは、活動の基本的な価値観や方向性が明確になっていることである。「困っているから助けてほしい」というだけでは協力も長続きしない。「その活動自体の楽しさは何であって、誰を幸せにするのだろうか」。このことをメンバー間で話し合っ、活動の意味を再確認することをお勧めしたい。ひとりひとりのおもいから活動の物語が紡がれたとき、それが協力者やファンを得る力となる。

たとえば地域雑誌の場合を考えてみよう。地域に移住してきた女性たち。その地域に縁もゆかりもない。「ここに暮らす人々と地域

のことを語りあい、温かみと節度ある近隣関係を形づくる〈場〉をつくりたい」というおもいのもと、地域のお年寄りや商店、食文化など身近なところに題材を求め、こつこつと雑誌づくりを行った結果、彼女たちの活動は「地域の人たちが気づかなかった地域」を紡ぎ出し、次第に取材、写真撮影、経理業務などで支援の手が差し伸べられるようになっていく。人々に共感の輪が広がったのである。活動の原点には、人々を惹きつける物語が眠っているはずであり、それはもつと広報活動に組み入れられて然るべきである。

ひとりに頼らず、

皆で運営することの大切さ

棚おろしは活動を引き継ぐ際にも効果を発揮する。創業者、リーダーがカリスマ的資質を持って団体を導いていた場合では、リーダーを失ったときの反動は大きい。リーダーの頭のなかには、活動の方向性、取り組みの核となる運営ノウハウ、人脈がつまっている。その喪失は文化活動をあつという間に危機へと追い込む。リーダーが果たしてきた役割をひとり引き継ぐことはきわめて困難であり、後継者は多大な負荷によって潰れてしまいかねない。実際、このような危機に見舞われた団体は少なくない。危機を乗り越えたところは、残されたメンバーが自分たち

の弱さを認め、リーダーが担ってきた役割を分担したという。それによって結束力が高まったという話も聞いている。けれども本来ならば、このような状況になる前に対応しておきたかった、というのが彼らの本音であろう。これらの事例は、リーダーの役割の棚おろしをあらかじめ行い、数人で責任を分担する複数リーダー制へと移行しておくことの大切さを教えてくれる。

やり取りを記録し、引き継ぐ

引き継ぎに向けた棚おろしでは、まずはリーダーが運営活動の詳細な記録を残すことが望ましい。行事や公演の記録だけでなく、活動プロセスで困ったこと、誰に何を

頼んだのか。資金の流れも記載しておく。うまく整理できなければ、5W1Hで棚おろししてみることをお勧めしたい。たとえば音楽祭の運営において、地域の企業に協力を求めている場合、そのやり取りはメンバーに共有されているだろうか。

①誰に (Who)

X工務店のY専務。

②何を (What)

メイン会場の舞台設営と運営補助。

③どこで (Where)

X工務店の会議室。

④いつ・どの段階で (When)

イベントの八カ月前。

⑤なぜ (Why)

X工務店のY専務はかつて東京で

ミュージシャンをしていたので、会場の設営、裏方業務にも精通しているため。

⑥どのように (How)

事業費を開示して、十分な支払いができないことを伝えた。「子どもたちの感性を育む」という理念を丁寧語り、協力いただけるところになった。

同様に、記録を残しておけば、自治体などの公的機関への慣習的な対応も整理できる。一連の業務を整理できれば、メンバーごとの得手不得手による役割分担がしやすくなる。活動記録を抜粋すればマニュアルにもなり、運営活動に手が回らなくなったとき、外部に助っ人を依頼する際の手助けともなる。

記録下手には聞き取りを

なかには記録下手なリーダーもいるだろう。そういうときは聞き上手なメンバーの出番である。該当者がいなければ、大学の研究者やミニコミ誌の記者など、インタビューをよそからみつけてくるのもよい。その役割はリーダーの頭のなかにあるイメージを掘り起こすことにある。リーダーが意思決定をした理由や背景を、前述した5W1Hで聞き取ってみてはいかがだろうか。リーダーの頭の整理にもなり、現状の課題解決の糸口もみつかるかもしれない。

人を惹きつけ、勇気づける物語

人々の嗜好が多様化するなかで、地域文化活動の魅力や内容を的確

に伝えることが求められている。その観点から、創業物語をまとめておくのもいい。人が伝記に引き寄せられるのは、物事を成し遂げようとする人々のところざしや熱量に感化されるからだろう。そこからおもわぬ縁が生まれるかもしれない。あるいは、それが先々の運営を担うメンバーが運営で苦しんだとき、心の支えになるかもしれないし、状況を打開するヒントになるかもしれない。ある合唱団は設立から半世紀以上を経て、創業から現在まで、各人が撮影した練習風景の写真やビデオ映像を持ち寄って、記念ビデオを作成した。記録を残すという意味もあるが、編集に取り組むなかで創業メンバーの考えが今さらながらおもし



出されたという。

焦らず、温かくつなぐ

何より事業の引き継ぎは時間のかかることである。活動を持続させている団体は、地域をひらくことでよそから新たな仲間を得ている。ただし、リーダーとなる人物をよそからすぐにつれてくるのは難しい。ある伝統芸能の現場では、重要な役柄を二十代のうちから担わせてきた。彼らは必ずしも、伝統芸能に高い関心を寄せていたわけではない。けれども、役割をこなしているうちに「地域文化の運

営を担うメンバー」という意識が芽生えたという。リーダー経験者のひとりには、『先々のために今、これをさせておこう。失敗は当たり前。受け止めてあげよう』という姿勢に励まされた」と振り返っていた。また、ある劇団では、脚本家を育てるにあたり、先輩が伴走者となってよき聴き手に回っている。地域から離れた仮想の内容に行きがちな若者に、活動の基本的な価値観や方向性からはずれないようにさとしながら、若い人の創造性を潰さないように、その成長を待つのだという。どんな組織

でも、人づくりには温かみを帯びた計画志向が欠かせない。

棚おろしが磨く活動の楽しさ

棚おろしは、後から来る者のために、活動を分かりやすく簡素にしておくことだが、ただ単に効率化のために行うのではない。地域文化の楽しさを磨くものである。その楽しさの根っこにある動機、つまり活動の根幹を明確にすれば、それが新たな活力となり、地域や参加者の輪を広げることにもつながっていく。棚おろしの結果として、活動の規模が縮小することもあるだろう。けれどもそれは衰退を意味するのではない。アマチュアだからこそその柔軟性と潔さに人々は共感する。文化活動がつな

ぐのは形ではなく、心である。その文化活動が未永く、人々の心を豊かにするように。

地域文化活動を続けていけば、時代も変わり、地域社会も変化する。これまで通りではうまくいかなくなることが出てくる。なかでも活動の担い手であるメンバーの不足や高齢化、リーダーや中心メンバーの後継者難など、人の問題が大きな課題となっていく。

このような問題にうまく対処している事例をみると、驚くほど考え方が柔軟だ。もちろん活動の本質は大事にするのだが、そうでもないところについては変えてもかまわないという姿勢が見受けられる。だから、これまでのルールや古くからのしきたりまで変えてしまう。障害や垣根をどんどん取り払ってしまう。思い切って自分たちの内と外にある仕切りをはずしてしまう。それによって活動に参加している人たちが活性化して後継者も誕生し、外からも新しい人が入ってくるのである。

p32 p28 p26 p24 p22
 33 定禅寺ストリートジャズフェスティバル
 札幌こどもミュージカル「ボロリンタン」
 おけと人間ばん馬（撮影：桑田瑞穂）
 能勢人形浄瑠璃「鹿角座」（撮影：桑田瑞穂）
 コスキん・パレード

仕切りをはずしてみたら



忙しくなった日本人

メンバーが集まりにくくなった原因としては、地域の人口減少、少子化や高齢化のほか、人々の生活が非常に多忙になったということがある。かつての地域文化活動で中心的役割を担っていた学校の先生と役場の職員は多忙をきわめているし、一般サラリーマンはこれまで残業が増え、兼業農家は休日も働かなくてはならない状況だ。さらに、比較的時間の自由が利き、地域文化活動の担い手として多数を占めた自営業者も長時間働かざるを得なくなっているという現実がある。全国的にどのジャンルにおいても参加者が少ない三十から四十代は、地域では数少ない青年層としてさまざまな役割を担うが、

それ以外の人も、理解者、支援者、助っ人として支えてくれるという。「よその保存会は、好きな人が集まってやっているが、うちは地域ぐるみでやっているんです」とこの仕組みをつくったリーダーは語る。そもそも、活動を取り巻く人のなかには、参加したいとおもっている人も、つい言い出せない人も多い。その背中を押す意味で、気分を楽にして参加してみるという機会をつくることが有効である。

神事と女性

伝統的な文化活動の場合、男性限定の役割を女性にひらくかどうか悩んでいるところは多い。お囃子などの周辺のな部分だけ参加を認めたり、将来を見据え

基本的に働き盛りだし、子育てにも忙しい。その子どもたちでさえも、塾や習い事、クラブ活動、学校の統廃合による通学時間の増加などで忙しいのである。

三年だけでいいから

新しい人に入ってきてもらうためには、期間や役割を限定して、参加する際の負担を減らすという方法がある。ある伝統芸能の保存

会では、地域の青年たちに三年だけ手伝ってもらうシステムをつくった。三年間の役割も明確に決めてあり、一年目は誰にでもできる簡単な役。二年目はある程度重要な役を与え、三年目は二年目の人の後見役を務める。このようにハードルを下げて「三年だけでいいから」と頼まれると、なかなか断りにくい。三年後、四割くらいの人が正式メンバーとして残り、

て女子にも指導を始めているところもあるが、厳格な神事の場合なかなか踏み切れないでいるようだ。離れたところに住んでいる血縁者や近隣の男性に参加してもらってなんとかしのいでいるが、いつまで持ちこたえられるかは疑問だ。十年ほど前から、女性の舞い手を認めたある伝統芸能の保存会長は言う。「人間が勝手に決めたしきたりを破っても、神様は怒らないとおもう。だけど、舞いを奉納できなくなったら、神様はきつと悲しまれる」。

年齢や性別による仕切り

一方、あまり宗教色の強くない芸能や祭りの場合、かなり早くから開放が始まっている。かつては

成人男性に限定されていたある伝統芸能で、一九七〇年代に誕生した先進的な団体が子どもや女性にも門戸をひらいた。この団体は人気を博し、現在では多くの団体で子どもや女性の参加を認めるよ



うになっている。成人した子どもたちが今や活動の中心を担い、女性メンバーの子どもたちも次々に活動に参加している。一九八〇年代に女性にも参加を認めた祭りの関係者は、「女性が入ってきたら男どもが張り切ってしまった

て、以前よりも活気が出たんですよ」と話す。性別や年齢による仕切りを取りはずすことで、地域のなかの人材を活かし、活動を活性化させることができるのではないだろうか。

子どもが大人をつれてくる
次世代の担い手である子どもたちの参加を促すために、幼稚園や小中学校、高

校への出前公演や、クラブ活動などでの指導を行っている団体は非常に多い。ある祭りでは、以前は高校生の参加が禁止されていたが、一九九〇年代に学校の許可があれば参加可能としたところ、今日では二千人以上の高校生が参加している。子どもが参加すれば、観客または助っ人として、父母や祖母、あるいは兄弟姉妹の動員も期



待できる。多くの活動で中抜け世代となっている三十から四十代の関心を引くために、まず、子どもを巻き込むことは効果的だと思われる。この場合、子どもの参加募集の窓口として学校に協力してもらったうえで、自分たちで説明をして勧誘するという手順を踏めば、円滑に進むことが多いようだ。

また、盆や正月に帰省した人々を呼び込む意味で、同窓会などをひらいたときに、都会から帰ってきた人に活動のことを話すと、仲間が増えることもあるだろう。

過疎に悩む祭り

町内会や氏子によって担われてきた伝統的な祭りで、少子高齢化と人口減少によって、深刻な担い

手不足に見舞われているところは多い。この場合は、外側の仕切りをはずして地域をひらき、外部から担い手を呼び込む以外にない。四十年以上、子どもが生まれていないある過疎地で行われている祭りでは、一九七〇年代から隣町の小学生に参加してもらっている。神事である祭りに、氏子以外の人を入れることに当時は大反対もあった。だが、「しきたりを守るよりも、祭りを守ることが何よりも大事」と英断を下した。現在ではその子どもたちが成人して祭りの重要な役割を担い、その子どもや孫までも参加している。氏子たちのコミュニティの外側に、祭りを通じた新たなコミュニティが誕生しているのだ。

ドーナツ化現象にあらがう祭り

ある大都市の祭りでは、ドーナツ化現象で住む人がほとんどいなくなつた繁華街でも、町内会として四百年以上続く伝統を立派に守っている。郊外の住宅地に住む店主たちが中心になり、親戚や友人、店のお客さんを集めて三日間にわたる祭りを運営しているのだ。数年前にある店の常連だった外国人が参加したことから、今ではさまざまな国籍の十数人の外国人も祭りに参加している。そのほとんどが、SNSなどインターネットで外国人も祭りに参加できることを知った人たちで、なかには、この祭りのためにわざわざ来日する人もいるそうだ。

負担を減らす

仕事や家庭の事情で、メンバーが忙しくなつてやめてしまうという問題も深刻だ。メンバーが忙しくても活動を続けられるようにするために、それぞれが置かれている状況をきちんと把握して、負担を減らすための改革をすることが必要だろう。練習や公演の回数、時間、時期、方法を見直しながら、どうすれば活動の質を落とさず、継続できるかを、皆で議論してみてもどうか。

また、伝統的な行事では、輪番制で民家を主会場とすることがあるが、あまりにもその家族への負担が大きく、引き受け手が減っているという。このままでは行事の継続も不安視される。そこで、会

場を地区の集会所などに移したり、

特定の家族が担っていた役割や作業を地域全体で分担。行事の間に提供される伝統的な食べ物にも工夫を凝らして簡単につくれるようにするなど、さまざまなことが行われている。個人への負担を減らすために、何百年も続いてきたしきたりを見直すことも、保存・継承という大目的のためには必要になつていないだろうか。

出入り自由なつながり

メンバーの負担を減らすには、必ず練習や会合に出席し、公演やイベントには毎年参加しなければならぬ、という縛りはずすということも考えられる。仕事や家庭の都合で一時活動を離れた人が

自由に出入りできるようなゆるやかなつながりをつくる。時間ができたらいつでも戻ってきてもらえるような仕組みづくりだ。あるアマチュア劇団では中・長期の公演計画を発表して、OB・OGだけでなく現役メンバーも自分が参加できる公演、果たすことのできる役割を申請する。この劇団のメンバーは「よき劇団員たる前に、よき社会人たれ」。劇団員ひとりひとりが無理をせず、時間に余裕のある人が、自分ができる範囲で最大限の力を発揮できる仕組みともいえる。

中核メンバーが足りない

担い手不足については、もうひとつ別の問題がある。それは活動

全体を運営する中核的なメンバーの不足とその後継者問題だ。これは活動全体のメンバー不足とも関係する面もあるが、問題が深刻化しているのはむしろ、規模が拡大した活動だ。本番前後だけ手伝う何百人ものボランティア・スタッフや、一万人を超える踊り手がいる大型イベントでも、年間を通じて何回も集まり、本番前はほぼ毎日かかりきりになる中核メンバーはどこも不足している。役場で事務的な部分をカバーしている場合もあるが、全体の運営を検討し、決定し、動かしていくのは地域住民による中核メンバーだ。



中核メンバーが疲れている

中核メンバーの多くは活動に長らくたずさわりそのなかで自らの能力を磨き、幅広い人脈を築いてきた。それゆえにこそ、大規模化した活動でも少数精鋭のメンバーで運営できているのだが、拡大してから入ってきた新規参入者にはあまりにも荷が重い。新人に任せるとよりは自分でやった方が速いので、中核の熟練メンバーが仕事を抱え込み、後継者がうまく育たない。規模の拡大と熟練スタッフの高齢化が進み、続けることが苦しくなっている、疲れているようにおもわれることがある。

仕事を抱え込まない

一般メンバーと中核メンバーの間にみえない垣根ができてくるのかもしれない。その大きな原因は、中核メンバーがやっている仕事はすごく大変で、自分たちにはとてもできないと思われることではないだろうか。この垣根を越えやすくするために、まずは中核メンバーひとりひとりの負担を軽くしてみよう。抱え込んでいる膨大な仕事を一度細かく分けてみる。誰にでもできるようにそれぞれの業務をマニュアル化して、新人も含めて広く役割を分担してもらおう。パートごとに、リーダーとサブ・リーダーを決めて、どんな仕事を任せていく。一方で、パートを超えて、手の空いて

いる人は、ほかのパートの仕事もどんどん手伝う。仕事を抱え込まない環境をつくるのだ。

得意な人を探す

もちろん、垣根を低くしてもなかなか人が集まらない場合もあるだろう。その場合は、できるだけ具体的に、こういう人に手伝ってもらいたいと公募する。あるいは、あなたはこういうことが得意だから手伝ってほしいと一本釣りしてみよう。たとえば、経理が分かる人、インターネットに詳しい人、裁縫のできる人、絵の上手な人、などと具体的に協力者を探す。実行委員会などの運営側のメンバーになったら、いろいろな難しいことをさせられるのでは

という不安を取り除き、その仕事

であれば得意だという人の参入を促す。人は自分の得意なことで頼られる、感謝をされるということは気持ちのいいものだから、引き受けてもらえる可能性は高い。

リピーターも仲間に

熱心な観客や出演者のなかにも、そういう人がみつかるともしれない。その地域文化活動が大好きで通っているのだから、活動の内側に入って仲間になれることは、むしろ嬉しいのではないだろうか。メンバーとしてのリクルートの対象を地元民以外に広げること、有効な手である。今や携帯電話やメールで情報交換は楽にできるので、遠方に住むリピーターが中核

メンバーとなって活躍している例も少なくない。

スポットライトをあてる

運営側の中核メンバーの仕事は基本的に裏方で、陽があたらない役目だ。だが、やりたい、やってほしいとおもう人を増やすためには、ときにはスポットライトをあててかっこよく見せることも効果的ではないだろうか。たとえば、機関誌やホームページなどで、活動を支えている人たちの素顔や地域文化に寄せる熱いおもしろいを紹介する。ときには、メディアからの取材もあるかもしれないが、そういうときにはリーダーばかりでなくて、中核メンバーのなかの若手にも登場してもらおう。

感動の場を

また、やってよかった、来年もやろうとおもってもらうためには、やりがいを感じてもらうことが何よりも大切だ。そのために、一般参加者や出演者から感謝してもらえるシーンを演出してはどうだろうか。たとえばあるコンクールでは、賞の発表などすべてのイベントが終了した後、実行委員がステージに集合する。観客はぞろぞろ帰り始めているが、会場に残っているコンクールの出場者たちからは大きな拍手が寄せられる。抱き合っていて泣いている実行委員の姿もみられる。感動の涙を流したこの人たちは、きつと来年も続けるであろうし、その感動を伝え、新たなメンバーを呼び込むのではないだろう

うか。

リーダーの喪失

最後に、中核メンバーの後継者問題と同じく、リーダーの後継者問題も深刻だ。特に、リーダーが非常に長く人々を導いてきたようなカリスマ型の指導者であった場合、リーダーの引退あるいは死去によって、活動が大きな混乱や危機を迎えたり、場合によっては解散に至ったりするケースもある。活動の方向性を決め、メンバーをまとめ、外部の支援者を巻き込み、さまざまな困難を乗り越え、成功に導く。そのほとんどを、リーダーひとりの知略、人脈、指導力によって達成してきた場合である。リーダーがあまりにも偉大で

あったために、後継者がみつからない。すべてのノウハウがリーダーの頭のなかにあったため、どうしていいか分からない。リーダーとともにメンバーも高齢化していて、指導者を欠いてしまっただけは続けられないなどの理由で、解散の道を選ぶ。

リーダー候補の育成

そうならないために必要なことはもちろん事前の人材育成だ。将来のリーダー候補を育てるために、まず、リーダーの周辺に中核で支える複数のメンバーを集める。そして、リーダーが行く先々に彼らを伴い、自らの考えやノウハウを伝えていくとよいのではないだろうか。支援者や行政へのお願い事、

問題が起きた場合の交渉、他団体との交流の場には複数の後継者候補を同席させる。人脈を伝え、人付き合いのコツを体得してもらう。さらに、リーダーのおもいや経験、ノウハウを伝えるために、活動の記録を残しておきたい。それは、その後の世代交代を見据えたうえでも重要だろう。

複数リーダー制

できれば、早期にこの中核メンバーによる複数リーダー制に移行して、前リーダーは背後から支援するという形が望ましい。だが、一般的にカリスマ・リーダーほど任期が長期化する傾向があるので、これは難しいかもしれない。ただ、複数リーダー制はカリスマ・リー

ダー喪失後の混乱や危機を乗り越えるうえでも有効だ。

複数リーダー制を担う中核メンバーは、これまでリーダーがひとりで担っていた役割を、それぞれ能力や得意分野に応じて分担する。カリスマ・リーダーの多くが、新しい事業を発案するプロデューサーであり、現場を指導するディレクターであり、さまざまな人の意見を調整するコーディネーターであるが、これを分担する。このなかから次のリーダーを選ぶ場合は、コーディネーター型が望ましいと思われるが、伝統的な芸能や祭りの世界でみられるように、輪番代表制にすることも有効かもしれない。

若者へのバトンタッチ

カリスマ・リーダーの後継者抜擢法として興味深いのは、親子ほど歳の離れた若者へのバトンタッチだ。場合によっては、孫世代へバトンを渡すということがあってもよい。

長年指導してきたリーダーが不在になったとき、ナンバーツーだった人、あるいはすぐ下の世代が引き継ぐ場合が多い。しかし、前リーダーが偉大であればあるほど、引き継ぐ者にはプレッシャーがのしかかる。年齢の近い世代であれば、気兼ねや軋轢もある。長年やってきた本人のプライドもあってまわりに助けを乞いにくく、うまくいかなることがよくあるようだ。

その反対に、思い切つてうんと若い世代に引き継いでうまくまとまっている事例がある。そこには自分が未熟であることを素直に認め、上下の世代に助けられながら、成長していった若きリーダーたちの姿がみられる。リーダーを支える中核グループの層は厚く、リーダーと同世代の人たちが新たに活動に参入し、組織全体の若がいりにも役立っているようだ。

よそ者へのバトンタッチ

また、その若者がよそ者だった例もいくつかあり、外国人である場合さえある。活動に惚れ込んで移住してきた若者が、そこで結婚して家庭を営み、定住

するというようなケースである。自分たちの地域の文化を愛し、誰よりも熱心に活動するその人を支えようとして地域が結束し、いつしかよそ者であった彼または彼女がリーダーになっている。よそ者であるリーダーは地域のしきたりや暗黙のルールに通じていないために摩擦を起こすこともある。しかし一方で自由な発想で内と外の仕切りを取り払うこともできる。これによって活動に新機軸をもたらし、ややもするとマンネリ化しがちな活動を活性化することがある。また、地域外の人脈も豊富で、外からどんな人を呼び込むことにも成功している場合が多い。

風通しをよくする

地域の文化を守り、伝えるために何よりも大切なのは、人。活動の担い手を増やすために、今いるメンバーが続けられるように、そして後継者を育てるために、障害になっているもの、人と人とを隔てるものなど、内と外にあるさまざまな仕切りをとりはずしてみよう。そうすることによって風通しがよくなり、組織のなかが活性化し、外からも新しい人が入ってくるのではないだろうか。



p46 p41 p39 p38 p36
— 47 —
砂浜美術館「Tシャツアート展」
いいだ人形劇フェスタ
能勢人形浄瑠璃「鹿角座」(撮影…桑田瑞穂)
津川 狐の嫁入り行列 (撮影…鈴木 勝)
片貝まつり (撮影…中田 昭)

ゆる
る
や
か
に
つ
な
が
る

人口減少が進み、担い手不足に拍車がかかる。人々の価値観が多様化し、地域文化活動への関心が薄れていく。しかし、ちょっと考え方を変えてみたらどうだろう。人口が減るからこそ、人間同士の係わり合いの豊かさがより大きな意味を帯びてくる。それぞれ異なった価値観を持つ人々がいるからこそ、多種多様なつながりが生まれる。地域内外のさまざまな主体と無理なくゆるやかな関係を育み、つながりの力で時代の変化をしなやかに受け止めながら、地域文化活動の未来への道筋を描いていくすべを探ってみよう。

p48
浜松まつり「初風揚げ」(撮影…鈴木勝)





地域社会あつての地域文化活動

地域文化活動は、その土地の歴史や風土に根ざしつつ、時代に応じた新たな文化を構想しながら、住民やその土地を訪れる人々とともに、ときには楽しみを、ときには苦しみをもに分ち合ってきた。地域文化活動を通して生まれた新たな社会関係が地域社会を豊かにし、そのうえに地域文化活動もまた新たな芽吹きを重ねていく。地域文化活動が単なる文化活動で

はなく地域を冠するゆえんは、このように地域社会との関係や人間同士のつながりを大切に育んできたところにある。

しかし、こうして地域文化活動とともに時代を歩んできた地域社会が、現在、数多くの問題に直面し、未来への展望を見失いつつある。それは切っても切り離せない関係にあった地域社会と地域文化活動との関係にも影響を及ぼしている。

人口減少・高齢化に悩む地域社会

人口が減り、高齢化が進むなかで、従来の活動を維持するだけで精一杯のコミュニティ。一枚二枚と葉が落ちていくように人が減りゆくなかで、将来への展望だけでなく、喪失感とともに生まれ育った地域への誇りすらなくしていく。何もかもに後ろ向きになり、やがて地域文化活動にも背を向けてしまふ。あるいは、地域文化を支えるようにも支えるだけの力がない、そのもどかしさから、かえって地域文化活動を遠ざけてしまうこともある。

多様化する地域社会

人の流動化や住民の多様化も、地域社会との関係に新たな課題を

もたらしている。一昔前のように生まれた地域で一生を過ごす時代ではない。昔ながらの下町でも店舗や民家の跡地にマンションが建って新しい住民が流入することもあり、農山村でも都会からの移住者が増えている地域がある。また、交通が便利になって気軽にあちこちに足を延ばすことができるようになり、インターネットを通じて遠く離れた人とも簡単に交流できるようになれば、あえて地域のなかで生活から趣味まで完結させる必要はなくなる。人の流動化や住民の多様化は地域にぎわいをもたらす一方で、意識や関心の分散とともに、地域としてのまとまりを保つことが難しくなってくる。これまでのように「以前か

らやってきたことだから」「皆で楽しんでることだから」という暗黙の了解が通用しない場面も出てくる。

取り残される危険性

地域文化活動の現場にもその影響は及び、これまでにはなかった住民との摩擦が生じるようになる。たとえば祭りには音がつきものだが、それを騒音と感じる人も現れる。やがて地域文化から目を背ける住民まで現れる。寄附金や協賛金を募ったりボランティアをお願いしたりしても、「なぜ協力しなければならぬのか」と拒まれる。そうなつてはじめて、地域社会の調和のうえに地域文化活動が成立していたことを思い知らされる。

多忙のなかで忘れられていく

職場も忙しくなった。組織の合理化は年々進む一方で、たとえば以前は数人で手分けしてこなしていた仕事が一にのしかかるようになる。皆が目の前仕事に忙殺されて汲々とし始めると、ただでさえ忙しいのに地域文化どころではないと、活動に時間を割くことがはばかれるような雰囲気が生まれる。以前からのメンバーは忙しい職場と折り合いをつけながらなんとか時間をやりくりして地域文化活動に取り組んでいるが、それにも限界はある。当然ながら新たなメンバーの加入もままならない。こうして、多くの地域文化活動が後継者不足、とりわけ若手の確保に苦しんでいる。

地域社会の未来があつてこそ

地域文化活動は後継者不足を始めたとしてさまざまな悩みを抱えているが、このように地域社会もまた、数多くの問題を抱えている。そして地域文化活動も地域社会もそれぞれのことで手一杯になるあまり、互いに関心を向ける余裕もなく、両者の間にはすさまじい風が吹き始めている。

そうではなく、それぞれが大変だからこそ、互いに向き合い、寄り添い合うことで、それぞれが直面する問題を乗り越えることはできないものだろうか。かつて終戦直後の焼け跡のなかでアマチュアの劇団や市民オーケストラを立ち上げた人々がいた。大都市の新興住宅街で地域と人々のつながりを

取り戻そうとミニコミ誌を立ち上げた人々がいた。地域が疲弊しているから地域文化どころではないではなく、むしろ地域が疲弊しているからこそ地域文化活動の出番があるのではないか。そして地域社会の未来があつてこそ、地域文化の未来への展望もひらけるのではないだろうか。

住民と活動を分かち合う

まずは小さなことでいいから、地域文化活動の側から手を差し伸べ、地域住民との接点をひとつでも多く増やしてみよう。たとえば音楽祭のなかには、屋内のメイン会場で開催するコンサートとは別に、屋外でのパレードや練り歩きなど地域住民が気軽に参

加できるプログラムを用意している活動もある。地域の皆で楽しさを分かち合うことは、地域文化活動の原点でもある。

参加者と役割を分かち合う

また、材料の提供や観客の誘導などちょっとしたことでよいから、活動を手伝ってもらえないかと声をかけてみるのも手である。地域の皆で役割を分かち合うのもまた、地域文化活動の原点である。ひよつとしたらこうした機会を通じて活動の楽しさを知り、メンバーとしてより積極的に関わってくれるようになる可能性もあるだろうし、そうはならなくても、活動の一端を知る住民が地域社会に増えることは、地域社会とのつな

がりを豊かにするうえで決して悪いことではないはずだ。



子どもとの接点を手がかりにファミリー層との接点をつくるなら、子どもとの接点をつくるのが近道だ。ある都市のイベントでは、駅前の大型マンションに転入してきたファミリー層との関係づくりで苦慮していたが、イベントに子どもたちが出演する機会を設けたところ、転入してきたファミリー層から喜ばれ、以来、イベントへの協力が得られるようになったという。イベントに子どもを招けば、家族や親戚も観に来るので会場にもぎわい、一石二鳥である。

学校と連携する

子どもとの接点づくりで重要になるのは、地元の学校との連携である。もとをたどれば学校は地域

とともにあったはずなのに、教育機関としての役割が重視されすぎたためか、あるいは学校の統廃合が進んだためか、いつしか学校は地域から縁遠い存在となつてしまった。

だが、最近は状況が変わりつつある。教育基本法の改正や学習指導要領の改訂を通じて、教育の現場では地域との関わりが重視されつつある。地域文化活動を学習内容に盛り込んでもらうとなるとハードルは高いが、児童や生徒の課外活動として位置づけてもらえる可能性は十分にあるだろう。また、学校との連携による副産物として、空き教室や廃校を活動の練習場所として活用できる可能性がある。多くの学校では生徒数の減

少に伴い、使われなくなったスペースが生まれているからだ。

学校の決定権を持つ人間と話す

学校との連携については、学校に相談してはみたものの、組織の壁が予想以上に厚くてなかなか話が進まず、いつのまにかうやむやになってしまったという類の声を聞く。そうした経験が、学校との連携に尻込みする要因にもなっているようだ。学校との交渉を首尾よく進めるには、校長や教育長など決定権を持つ人間と話すことである。現場の教員に話を通すことも大事だが、現場の教員では判断しきれないことも多いので、校長や教育長など決定権を持つ人間に相談した方が、話が早く進みやすい。

第三の居場所（サード・プレイス）

としての地域文化活動

疲れている地域や住民を元気にするために貢献できることを考えて提案してみることも大事である。家庭でも仕事でも何かとストレスのたまることが多い現代社会において、家庭や職場以外の第三の居場所の重要性が高まっていると言われるが、地域文化活動には、家庭や職場での人間関係や上下関係にとらわれない第三の居場所としての役割がありうるのではないか。

ある合唱団では、十代、二十代の若者が七十代の高齢者と友達のように話す関係がある。世代はかけ離れていても、ひとたび合唱の世界に入れば、ひとつのハーモニーを奏でる仲間同士なのである。



確かに地域文化活動にたずさわることで時間は割かれるけれども、日頃のストレスから解放される場所があることで、生活にもハリが出る。視野や発想、さらには人間

関係が広がることで、本業に相乗効果をもたらすこともある。

働き盛りの世代にうつたえる

地域文化活動は時間に余裕のある高齢者がやるもので、忙しい働き盛りの世代には関係ないことだというイメージが広がり、後継者の確保に支障をきたしているようだ。しかし、地域文化活動が第三の居場所になるなら、むしろ忙しくてストレスがたまりやすい働き盛りの世代だからこそ地域文化活動にたずさわる意味も出てくる。地域文化活動をやっていれば、人間力が向上し、結果として仕事もはかどるといった、働き盛りの世代がメリットを感じるようなメッセージを発信することができない

だろうか。地元の企業や団体にもそうした役割や効能を丁寧に説明し、従業員や職員が地域文化活動に参加しやすくなるよう理解と協力を求めてみてはどうだろうか。

地域に活力を還元する

地域文化活動を楽しみに地域外から多くの人が訪れるのなら、これを地域の活力につなげていく方法も検討してみたい。あまり観光目的ばかりに走りすぎるのは禁物だが、地域文化活動を楽しみに訪れる人々に地元の食事処や宿泊施設を紹介すれば、観光客からも地元からも喜ばれるだろう。地域に食事処や宿泊施設が足りないのであれば、農家食堂や民泊など新しい受け皿づくりを地元の住民と一

緒に考えてみてはどうだろうか。たとえばある伝統芸能の団体では、地元の女性グループと連携して観劇用の特製弁当を販売し、好評を博しているという。

縁遠くなる市町村

こうして地域社会とのつながりを大切にしていくことが、市町村（役場）とのよりよい関係構築にもつながる。これまで地域文化を資金面など多方面で支えてきてくれた市町村も、懐事情は相変わらず厳しいうえに、少子高齢化に伴って福祉により多くの予算を投じなければならぬなかで、文化活動への補助はどうしても後回しになりがちである。

市町村との関係では、市町村合



併も少なからず影響を及ぼしている。合併前は町や村を代表するイベントとして大事にされてきた活動が、合併後は拡大した市や町村の数あるイベントのひとつとして埋没し、役場からつれない対応を



とられたりする。近くにあった役場が支所に変わり、これまで親身に対応してくれた職員が、遠い本庁に移ってしまうこともある。

ニーズを説明して 市町村を引き寄せる

このように厳しい状況のなかでできることは、基本に立ち返って、自分たちの活動がわが市、わが町村にとって不可欠な存在であることを根気強くアピールして補助金削減を防ぐ努力をするよりほかない。その際にものを言うのが、日頃から育んできた地域社会とのつながりである。地域社会とのつながりを大切にし、強い信頼関係で結ばれている活動に対しては、役場も決して無下にはできないはず

である。

加えて、市町村とコミュニケーションを図るうえでは、こちら側のニーズを丁寧の説明することも重要だ。たとえば市町村は、大きな舞台やホールをつくることには熱心だけれども、日々の練習に必要なスペースの確保にまでは思い至らないことが少なくない。公共施設の整備や更新などの時機をとらえて、練習スペースなど活動に必要な設備の確保を要請して、その必要性に気づいてもらう努力が必要である。

合併を新たな仲間づくりの

チャンスに

市町村合併は悪いことばかりではなく、以前の市町村単位の垣根

を越えて仲間を増やすチャンスにもなりうる。ある山村で受け継がれてきた伝統芸能は、長年、踊り手の減少に悩んでいたが、合併を契機に大きくなった町の全域から踊り手を募り、危機を乗り越えようとしている。また、合併して同じ市となった地域文化活動同士で連携して集客に取り組んでいる例もある。このように、足元にある地域とのつながりは大事にしつつ、ふっと息を抜いてまわりを見渡してみると新たな可能性がひらけるかもしれない。

関係人口

さらに視野を広げ、地域の単位にこだわらず広くつながりを育み活かす方法も考えてみたい。その

ときにヒントとなるのが、近年注目されている関係人口という考え方である。観光や都市農村交流などで地域に出入りする人々のことを指す交流人口という言葉は以前からあるが、関係人口は一步進んで、地域には住んでいないけれども足繁くその地域に通い、田畑や山林を管理したり、地域課題に取り組んだりなど、地域住民と一緒に地域を支えていこうとする人々のことである。人口減少に向き合う方策のひとつとして、定住者を増やすだけが人口減少への対策ではなく、地域に関心を寄せ、関わってくれる人々の力を借りながら地域を支えていく方法もあるのではないかとの発想にもとづいて、最近になって新しくつくられた言



葉である。

こうした発想とそれにもとづく取り組みは以前から行われているが、本格的な人口減少社会を迎えるなかで、あらためてその発想が見直されてきたということだろう。それならば、地域文化活動においても関係人口の発想を役立てることはできないだろうか。

観客を仲間に引き入れる

まず、もつとも身近な地域外の人間として観客という存在に着目したい。すなわち、観客を単なるお客さん（受け手）としてとらえるのではなく、観客も活動を支える一員としてとらえ直すのである。始めは些細なことからよい。たとえば観客参加型の企画を設け

ることで、観客との距離を少しでも縮めてみてはどうだろうか。イベントの性質にもよるが、観客の飛び入り参加枠を設ける、あるいはコンテスト形式などで表彰を伴う活動であれば、観客の投票による賞を設けることなどが考えられる。練習や制作風景の一端を公開するなどして舞台裏を見せるのも、観客との距離を縮めるうえでは有効かもしれない。次章で詳しく触れるように、カメラマンに呼びかけて写真コンテストを開催するのも手である。

観客とのつながりを育む

一步進めて、常連客と交流の機会を設けることも検討してはどうだろう。ファンクラブをつくり、

イベント開催時に限らず定期的に連絡を交わし、交流を重ねてもよいかもしれない。交流を通じて、地域文化の楽しみを分かち合うだけでなく、活動を続けていくうえでの苦勞にも触れてもらい、さらに活動を支える一員としての意識を持つてもらえば、イベント時のちょっとした手伝いなど、支援や協力も得られやすくなるのではないだろうか。

ただしこうした常連客の囲い込みは良し悪しがある。常連客が幅を利かせすぎて、そのほかの客が入りづらくなり、閉鎖的な印象を周囲に与えてしまうこともあるからだ。あくまでもゆるやかな関係にとどめるよう、よい塩梅が大事である。

観客と一緒に考えてみる

資金の確保は多くの地域文化活動が抱える悩みだが、観客との交流を重ねていくうえで、解決の糸口がみえてくるかもしれない。たとえば入場料など料金の値上げや、これまで無料だった公演の有料化については、観客からの評価を気にしてためらうところが少ない。確かに観客がサービスの受給者としての単なるお客さんであるならば、料金が内容に見合ったものかどうかを厳しく問うてくるかもしれない。しかし、交流を通じて活動を支える一員であるとの意識を持った観客は、料金を内容の対価ではなく、活動を支えるために欠かせない収入源として理解するようになるのではない。そう

なれば、たとえば地域外からの参加者に対して割増の料金を設定するといった方法も、受け入れられるかもしれない。あるいは料金以外に寸志や寄附金といった形での支援をお願いすることも考えられるだろう。

重要なのは、観客と一緒に考える姿勢である。観客の意向を勝手に忖度して自問自答するばかりでは何も物事は進まないし、観客の意向についてとんだおもしろい違いをしている可能性もある。観客との意思疎通ができるぐらいの関係になったなら、おもしろい切っ掛けで運営側の悩みを打ち明け、一緒に考えてみてはどうだろうか。

クラウドファンディングを活用する

資金の確保について付け加えれば、地域住民や関係者、あるいは観客に協力を求めるだけでなく、インターネット上のクラウドファンディングを通じて、広く小口の資金を募ることを検討してもよいのではない。こうした手法は、継続的な資金調達ではなく、一時的な資金調達に向いている。特に、たとえば伝統芸能のお面などの道具類の調達は、寄附金の使い道が明確で、成果が実物として残るので効果を示しやすく、この手法が使いやすい。

インターネットを通して不特定多数に支援を呼びかけることになるので不安もつきまとうかもしれないが、逆に広く自分たちの活動

を知ってもらうチャンスでもある。実際に、クラウドファンディングを早くから導入している地域おこしの分野では、地域の新たなファンづくりにつながったという例が少なくない。

大学生と連携する

地域外とのつながりでいえば、地域文化活動に関心を寄せる大学生との連携も一考に値する。大学生は比較的時間の融通が利くので、活動に引き込みやすい。体力はあるし、情報機器や音響・映像設備などの扱いに慣れている者も多いので、スタッフとしての貢献が期待できる。全国のアマチュア音楽家が集うあるイベントでは、最初

生が、次第に演奏だけでなく、ボランティア・スタッフとしても関わるようになり、現在では会場の設営から運営まで一通りをこなしている。

大学生と接点を持つうえでまずおもいつくのは大学の教員を通じてゼミや研究室との交流を探ることだが、意外に見過ごしがちなのが大学サークルの存在である。ウェブページなどを開設している大学サークルは少なくない。インターネット検索や人づてに同じジャンルの活動に取り組んでいる大学サークルを探し、まずはイベントの案内を送ったり、演者として招いたりするなどして接触を試みてはどうだろうか。

プロボノを活用する

地域文化活動の実践運営には、対象とする文化活動に関する知識や技術以外に、会計や情報処理など組織マネジメントに関わる知識、出版印刷物や映像の制作に関わる技術など、広範にわたる専門的な知識や技術が求められる。それらを地域内の限られた人々でまかなうのは大変であるし、プロフェッショナルに外注すれば費用もかさむ。

その点、このところ注目されつつあるプロボノに協力を求めるのも手である。プロボノとは、専門家がそのスキルや知識を活かして社会貢献を行うボランティア活動のこと。近年ではプロボノをマッチングするサービスもあり、

さまざまなスキルを持った専門家が登録している。専門家側の意向や希望もあるから、すんなりマッチングできるとは限らないが、専門家の必要を感じたときに、一度は検索してみる価値があるのではないか。

ほかの地域文化活動と連携する

地域外とのつながりについて最後に指摘しておきたいのは、ほかの団体との交流連携である。活動を進めるなかで、壁にぶつかったときに相談できる仲間の存在ほど心強いものはない。同じジャンルの活動であればもちろんのこと、ジャンルは異なっても、活動を進めるうえでの悩みや問題は共通する部分も多いから、共有できる経

験や知識は少なくないのではない。同じジャンルの活動同士であればなおのこと、必要な道具をシェアしたり折にふれて共演したりといった、より具体的な協力関係も考えられるだろう。

たとえば山車の彫刻や修理ができる職人が減り続けているが、山車を使う祭り同士で協力して職人に切れ目なく仕事を融通するなど、手を取りあうことはできないだろうか。あるいは、稲わらを材料に用いる祭りは少なくないが、年々調達が厳しくなる稲わらの調達に向けて互いに協力しあえることはないだろうか。近隣に仲間となり、そんな団体がみつからなくとも、今は遠く離れた相手とでもインターネット上のSNSなどで簡単

に連絡が取り合える時代。全国を探せばきつとふさわしい相手はみつかるはずである。

無理せずゆるやかにつながろう

もとより地域文化は人間同士のつながりによって支え育まれてきた。人が減り、地域も疲弊し、地域文化活動にとって大変な時代だからこそ、原点に立ち戻って、あらためてつながりを大事にしてほしい。こころざしを大切にしながら誇りを持って活動を地域の内外にひらき、さまざまな主体とつながりを育むことにより、時代の変化や社会の変化をしなやかに受け止めながら、次の時代に活動をつなぐ方法を探ってほしい。

ただし、やみくもにつながろう

とするがあまり、自分たちのころざしを犠牲にし、活動の存続に影響が出るほどの負担を生じては元も子もない。大事なのは、肩肘張らずに自然体でゆるやかにつながること。負担に感じるようであれば、一步引いてみるのも手である。始めから、あれもこれもと手を出さず、できることから取り組もう。最初はほんのささやかなつながりでも大丈夫。つながりはつながりと呼び、相乗していくものだから。

p59 p57 p56 p55 p53 p50
51 秋葉祭り「お神楽」(撮影・桑田瑞穂)
中新田パツハホール「パツハホール音楽院」
浜松交響楽団
島の旅社「海女小屋体験」(撮影・鈴木勝)
高千穂神楽
小浜島はあちゃん合唱団(撮影・鈴木勝)

ま
わ
り
に
流
さ
れ
な
い

地域おこしがブームだ。地域が長い目でみて本当に元気になることはすばらしい。日本中で人口が減っている現在、少しでも多くの人たちに、自分たちの地域のことを知ってほしい、来てほしい、関わってほしいと思うのは自然なことだろう。

観光客がどれだけ来たとか、経済効果がどれだけあったとか、目に見える数値ばかりが喧伝され、目標にされがちな昨今でもある。けれども、長続きしている活動の多くは、「好きだからやってこられた!」とか「やっぱり楽しい!」とか、そんなゆるやかな喜びに満ちている。

p64
秋葉祭り「油売り」(撮影・桑田瑞穂)



地域おこしの罫

近年、地域おこしを専門とするプランナーやコンサルタント、デザイナーが増えている。もちろん優れた人もいるのだが、残念ながら、地域ごとの実情を深く探り、そこからその地域にしかない企画を立ち上げようとする人ばかりではない。どこの地域にも同じようなプランを出し、各地域がコンサルタントの商品サンプルのようにされてしまうことがあるからだ。「ひなびた田舎」を売りにしたいと考えていたのに、大型の外部資金が投入され、ひなびたままでは

いられなくなった、などという笑えない話も聞く。

中身あつてのデザイン

最近、ウェブデザインなどにお金をかけることも多くなった。こうしたことに補助金の下りやすい側面も否めないが、器（うつわ）だけできても中身がうまく入れられない、とか、どういう風に運用してよいか分からないという声も多く聞かれるし、高額なデザイン料やウェブサイトの維持におもわぬ経費がかかり、活動内容の充実にあて

金がなくなってしまうなど、本末転倒に陥っているところすらある。その土地、その活動に見合った内容を自分たちでつくりあげていくことが何より大切で、それを後押しするためのデザインであることを忘れずにいたい。

数値を超えて

五億円くらいなければ数十万人も呼べない、という話も聞いた。観光客などゼロに等しい土地に毎年、数十万人の人が来る、それはすばらしいことだ。イベントの知名度があがれば、その土地の知名度もあがる。それは、その土地に暮らす人たちの誇りにもつながるだろう。しかし、このお金が何に使われるのか考えてみると、優

たプロデューサー、名だたるアーティストを外から呼び、都会の広告代理店を巻き込んで話題性をつくる、というようなことだったりして、ほとんどすべてが「外」の都会に資金が流れてしまっているのが分かる。

もちろん、優れたアーティストが、その土地の、自分たちでは気づかなかつた魅力を再発見してくれることもあるだろう。しかし、主役はどこまでも外からやってきたアーティストとアートで、その土地ならではの魅力が人を呼んでいるわけではない。お金をかけ続ければ、外から人は来続けるだろう。しかし、お金がなくなれば、縁も切れる。そのとき、その土地に何が残るだろうか。「うん十万



人呼ぶ」ことだけが最終目的だと何も残らない危険性は大きい。それだけのお金をかける価値があるものかどうか精査することも大切だし、そのプロジェクトのなかで地元の人材を育てていく、そうした戦略が必要だろう。

国際化がすべてではない

国際イベントには見直すべきことも少なくない。海外から優秀なプロを招いて刺激を受ける、そういうことが大事な時期も確かにあるし、ほかの国の活動を視察することが大きな刺激になる場合も多い。しかし、外の力に頼ることだけが答えではないはずだし、マンネリ化すれば、かえって活動のエネルギーを低下させたり、散漫に



させたりすることもある。イベントの前身ではなく、通訳のボランティア探しに力を使い果たしてしまったなどというケースも少なくない。

自分たちの技芸の習熟や、技術の用い方を工夫することに力を注いだ方がよいこともあるはずだし、国内でのネットワークづくりが必要なものもある。国際化には目が向きやすいし、補助金の下りやすいということもあるが、なにも国際イベントを続けることだけが重要なのではない。二から三回やれば十分なこと、五年くらい続ければ役割を果たすということも大いにあるから、そのときどき、今後の自分たちにとって何が必要かを考えながら、地に足の着いた計画を練り直し続けることも大切だろう。

学校の役割を考える

伝統芸能の活性化のひとつに、学校現場で教える、ということが

ある。特に、各地の祭りを受け継がれてきた芸能の場合、地元の学校で教えてメンバー不足の解決につながったという話をよく聞く。だから、学校の役割はとても大きい。

一方で、学校の限界も知っておく必要があるだろう。特に教科学習に取り入れようとする場合、教材化することが必要になる。つまり、どこでも誰でも教えられるように、五線譜の楽譜にのせたり、地元で使う篠笛の代わりに鍵盤ハーモニカで吹けるようにアレンジしたりと、マニュアル化する必要に迫られるのだ。舞踊が体操のように単純化して教材にされていることも多いし、衣装・小道具も安く揃えられる工夫が必要だ。そ

して、一度教材化されると、その踊りは全国の学校で踊られる可能性が出てくる。だから、北海道の学校で沖縄の盆踊りを踊ることも、東北の踊りを東京の児童・生徒が踊ることもできるようになる。こんな芸能があるんだと知るきっかけにはなるし、その芸能の知名度もあがるかもしれない。

全国的に教材化してしまうと、

地域とのつながりが薄れる

しかし、たとえば沖縄のエイサーを東京の小学校で踊っていた児童が、エイサーが沖縄の盆踊りであることすら知らなかった、というような話もよくある。地域の伝統芸能が、そもそもその土地の歴史や風土のなかで育まれてきた

ことをおもうとき、そして、もともとどの芸能が、五線譜の楽譜に沿うようなものでも、鍵盤ハーモニカで演奏するものでも、機械的に揃って踊るような踊りでもないことをおもうとき、教材化された芸能が全国化することへの疑問も生じてくる。本物とは違う芸能が「本物」のようにとらえられ、ひとり歩きして伝わっていく危険性が出てくるからだ。それがまた、教えられた土地にもともとあった芸能を衰退させてしまう可能性すらある。

その地域にあつてこそその伝統芸能ということを忘れずに、安易に教科学習に取り入れて全国化することを目指すのではなく、地元の学校での課外活動や、地域を学ぶ

総合学習の一環に取り入れていくことなどで、その土地と結びついて生きてきた芸能の魅力を伝えることが大事なのではなからうか。

勝ち負けにこだわらない

勝敗を決めたりコンクール形式にしたりすることは、マスコミにも取り上げられやすく、参加者の士気をあげ、外からも参加者を募りやすいようにおもわれる。しかし、実は、これがネックになっているところも少なくない。勝ち負けにこだわりすぎて、交流の楽しみが失われることもあり、お互いの関係がぎくしゃくしてしまうことがあるからだ。またコンクールには審査基準が必要だが、この審査基準に合うようにと、

もともと個性豊かだった活動が画一化してしまった場合もあるし、あるいは逆に、審査基準が気に入らないと争い事になったというところもある。

伝統的な祭りも、それぞれの地区が「なんと」

「なんと」とおもって競い合ってきたから個性豊かで面白いものができあがってきた。そこには自分たちの基準があればよく、外からの順位付け、価値付けは必要ない。新しくつくられた祭りのなかには、コンクール形式を採用しながら、コンクールに参加しないグループの参加を認めているところもある。参加者のレベルと士気をあげることを鼓舞しながら、楽しみで参加する人たちにも門戸をひらき、皆

の祭りとなることを目指しているのだ。勝ち負けがすべてではないし、そもそも文化活動に優劣はない。ぎくしゃくし始めたなら、楽しむことに立ち返り、仕組みを変えてみるのもひとつだろう。

観光化の異

祭りやイベントなどの文化活動はよく観光化の要に置かれるが、行事が行われるのは年に数日きりだから、そのただけに地元で宿泊所をつくるわけにもいかない。実は、祭りに訪れる人が多くても、地元で泊まれる人、お金を落としていける人はとても少ない。旅行会社や交通機関、近辺の温泉地などが潤うことがあっても、地元にお金が入る仕組みにはなっていない



や道具にお金がかかるようになってきたとか、参加者の認識、全体の雰囲気自体が変わってしまったとかいう話もよく聞く。また、かつては活動の中心だった地元の人たちが、すっかり外から来る人たちの接待役になってしまったというケースも多い。

参加型イベントの裏側

いのだ。
そうした矛盾を乗り越えようと、もともと観せるものでなかった祭りでも、観光客用の座席を用意して、席料をとる地域もある。そうした取り組みも含めて、有名になりすぎ、観光客が増えすぎて戸惑っているところは少なくない。観せる意識が強くなりすぎ、衣装

民謡コンクール、食事の接待、地元の人たちとの交流会などなど、「お客様」へのおもてなしは年々エスカレートしている感がある。狭い地域にあふれるほどの人が来るので、本番の祭りのほかに「祭り風」の催しを盛んに催している地域もある。

もてなしすぎない

外から人が来てくれるのは嬉しいし、なかにはリピーターも出てきたりするのだが、もともとは自分たちのために自分たちで裏も表もこなしていたものが、「お客様」を精一杯もてなし、晴れ舞台に立たせるために、裏方仕事は何倍にも増え、地元の一部が裏方に徹することになってしまったところも

少なくない。なかには接待役の地元の人への遠慮から、名物のお祭り男が祭りを引退してしまった場合すらある。「おもてなし」しすぎない道を模索する必要があると思うだ。

一緒に楽しめる人たちとつながる

リピーターが裏方として活動を支え、また毎年手伝いにやってくる若い専門学校生や大学生たちが地元の人たちの士気を大いに高めている場合もある。しかし、地元の人たちがおもてなしに走りすぎると、「お客様」たちはどんどん勘違いをするし、接待している方にも無理が生じる。それに、そもそも、本当にその地域や活動が好きな人たちは、お客様扱いなど望

んではないなくて、その土地の一員として関わりたい、一員に近づきたいと思っていることも多いのだ。だから、参加者に仕事の一部を負担してもらおうのもひとつの手だ。対価を払った方が安心して楽しめるという人も少なくない。過剰なお客様扱いをしないことが重要だ。自分たちが楽しむことを忘れずに、そして、その自分たちが楽しんでいることを一緒に楽しんでもくれる仲間たちとつながり続けよう。

裏方に花を持たせる

おもてなしのしすぎに気をつける一方で、接待している人たちをねぎらい、励ますことも重要だろう。伝統的な祭りなどは、男性が主役で、女性が裏方を担っている

ケースが多い。そして、そういう裏方に、お客様接待の重圧がかかっているところも多い。このアンバランスをなんとか乗り越えようと、さまざまな取り組みが始まっている。かつては男性だけが参加していた、くつろいだ場面での余興に女性チームの踊りを組み込んだり、祭りの後の料理をつくるのに奮闘してくれた女性たちに、彼女たちだけで神輿を担いでもらう時間を用意したり、支えてくれる人たちに花を持たせる工夫も出てきた。

また、祭りで使う伝統的な食材を西洋料理のシェフにアレンジしてもらったり料理教室を開催して、裏方仕事を担っている人たちに、別の喜びを提供しているところもあ

る。あるいは、地元の食材を使ってさまざまな伝統料理をつくってもらい、それをお弁当の形にして観光客に売り、昔の村祭りでお弁当を持ち寄って芝居を観ていた雰囲気や再現したりするなどの取り組みも出てきている。料理という仕事を、接待役の義務にとどめるのではなく、一歩先に進める努力が行われているのだ。

素人カメラマンとのつきあい方

インターネット上に写真を載せることが流行っているし、素人カメラマンがどつと押し寄せる祭りなどは、もはや観光公害といってもいいような状況にあったりもする。カメラマンのなかには、その活動が好きなわけではなく、自分

が写真コンクールに入賞したいがためにやってくる人も少なくないのが実情だ。ところが、そんなカメラマンを仲間に巻き込んでしまおうとしているところもある。たとえば地元で写真コンテストを開催し、撮った写真を地元の役に立つように提供してもらおうようにするのによい。カメラマンが自分のために写真を撮るのではなく、地元のために撮ってもらう仕組みをつくること。これは、カメラマンの姿勢やまなざしそのものも変えることにつながるかもしれない。

自分たちのための時間の大切さ

一方、カメラが一切排除されたなかで夜の祭りや芸能を味わうことのときめきなども忘れずにいた

い。しつとりとした情緒的な踊りで有名な土地では、かつて踊りの最終日の夜から朝にかけて、大型観光バスもすっかり帰り、ほぼ観光客のいない、自分たちのためだけに踊る時間があった。

わずかに訪れていた観光客も息を殺すように、じつと静かに、ひたすら踊りを見つめていた。真夜中、カメラのフラッシュも一切たかれず、シャッター音も一切聞かれないなかで、静かに自分たちだけのために踊り続ける。踊りに酔うというのか、歌・三味線と踊りとがびたーと合う、身震いするような瞬間が訪れることがある。それは、すべての人にとって、自分たちの踊りの原点に立ち返り、踊る喜びにしみじみ浸る大切な時

間だったろう。そうしたぞくぞくするような感動が、芸の質を支え、芸を愛する心を育て、ほかにはない魅力的な情趣を生み出していく。「観せる」だけの祭りや芸能になっ
てしまえば失われてしまうものがある。魅力的な祭りや芸能であり続けるためにも、自分たちのためだけの時間を大切にしてほしい。

守るべきものを見定める

しかし近年、「誰も行けない場所に行く」ことを売りにした観光ツアーも組まれるようになり、さらに、スマホですぐに情報が共有されてしまうから、自分たちだけの世界に浸りたいときでも、観光客や素人カメラマンを排除することが難しくなっている。

もちろん観光客が来てくれることは、自分たちの誇りにもつながるだろうが、外国人も含め、増え続ける観光客やカメラマンをそのまますべて受け入れ続けていくと、いつのまにか自分たちが大事にしてきた中核となる部分を失ってしまふということにもなりかねない。長年の熱心なファンたちの落胆・人離れを生む原因にもなる。

大事なものを失わないために、大事なものに共感してくれる仲間たちとつながり続けるために、写真禁止の時間や場所をつくるなど、ひらく部分だけでなく、守る部分をしっかりと見定めていくことも大切だろう。



顔の見える関係づくり
今、各地の職人たちの多くが、顔のみえない使い手のためにものづくりをしている。機械生産がほとんどになりつつある現在、職人

のつくった工芸品なども、ひとつの商品としてデパートやセレクトショップなどの店頭に並べられ、売り買いされることが多いからだ。使い手も、つくり手の顔を知らぬままものを買う。しかも、かつては地元の素材を使ってつくっていた木工や焼物などでも、安価な外国素材を用いてつくっていることが少なくない。

そうしたなかで、その土地の素材を用いて、その土地の職人がつくったものを通して、使い手とつくり手の顔の見える関係をつくり直そうとする活動も出てきている。これは、つくり手の誇りとやりがいを取り戻すだけでなく、使い手にとっても、ものの背景や手仕事の背景を再認識させられる機会と

なっているようだ。つまり、ものを通して、その土地の自然や人とながり直すきっかけをつくっているのだ。地元の素材を用いることは、地元の自然環境を意識することにもつながる。今後、こうした関係性の回復や、やりがいの回復もまた、地域文化活動の大きな役割となっていくだろう。

残すだけでは夢がない

各地の町並み保存活動も、今、新たな岐路に立たされているようだ。「残すだけでは夢がない」とある人は言ったが、確かに保存が活動のゴールだと、その先がなくなってしまう。そもそも、町並み保存は多くが建物の保存に始まるが、まちが観光資源になり、観光

客が多数訪れるようになることで、建物を取り巻く住環境や自然環境が変化し、普通の暮らしを守ることも自体が難しくなってくることもある。

そこで、目に見える町並みだけでなく、それを支えるコミュニティ全体、取り巻く環境そのものの再生を試みている地域も出始めている。たとえば、木造家屋の町並みを残している地域で、商店街や小学校の校舎を新たに作るとする。現在では、東京の会社から安価な外国木材や資材を買い込み、組み立てるだけで建物ができるが、そうするとほとんどのお金は東京に行ってしまう。そこで、地域にお金の循環を生み出すためにも、あえて高額なお金を投じてでも、

楽しむことが原点

長く活動を続けるうちに、情性或周囲の期待に応じて活動が続けることが目的となって、活動がなくなってくることもある。しかし、地域文化活動は、自発性にこそ本質があり、自分たちが楽しまないことには、地域を元気にすることもできない。活動に工夫を加えることで、メンバーのやる気を取り戻し、楽しみながら活動が続けていくことを目指したい。

地元の木材を用い、地元の大工や左官に仕事を発注する。長い目で見てまわりの山を守り、職人たちの仕事を守り、そして、技術がその土地に伝承されていくような仕組みをつくるのだ。

一時の安さ、便利さに流されるのではなく、社会全体の仕組みと、その土地の未来を考える。地元の自然環境と人々との間で、よい循環がつかれるように策を練っていく。大きな目でそれぞれの地域社会でのつながりを再生させながら、新たな循環を生み出していくことが本当に大切になっている。

p76 p74 p71 p68 p66
— 67 —
対馬の朝鮮通信使行列（撮影：鈴木勝）
上山市民俗行事加勢鳥演舞者（撮影：鈴木勝）
黒川能「王祇祭」（撮影：鈴木勝）
「君の椅子」プロジェクト
内子町八日市・護国地区の町並み



続けることが自己目的化

地域文化活動にとっても「継続は力なり」は真実である。続けてきたからこそ、その活動が現に存し、多くの人々に喜びを与えている。そのすばらしい活動が続けてほしいと願って、今後も活動を工夫して続けていくことについて考えてきた。

しかし、毎年同じことの繰り返しで、どうしてもマンネリ化してしまうということもある。昔は楽

しんでやっていたが、今は形ばかりを続けているということもある。たとえば、活動を始めた頃はあれこれ工夫して充実した芸を観せることに燃えていたが、いったん形ができてしまうと、技を磨くということはあっても、それ以上の創造の喜びは減ってくる。あるいは気の置けない仲間と自分たちのペースで活動していたのが、評判を呼ぶようになると、何かと気を遣うことが増えてきて、自由がな

くなることも起こってくる。周囲から賞賛され、毎年楽しみにしているという人が多くなってくると、簡単に活動をやめることもできなくなってしまう。活動を続けなければというおmoiが強くなりすぎると、続けること自体が目的となってしまう、心から楽しめなくなるということもおこってくる。

義務感から続ける

もっと極端な場合には、情性で準備をするだけという形になってしまふこともある。評判になった催しなので、なんとか続けなくてはということで、役場や関係団体などの充て職で運営スタッフをまかなっているが、誰もが何のために、このような仕事をしているの

か分かっていない。

住民のなかには、昔のことを知っていて、あれこれ注文を付けてくる人もいるが、運営側としては煩わしいので、最小限のことだけに合理化したいと感ずることもある。文化というよりも、地域おこしイベントとしての側面が強調されて、観光客さえ来ればよいという、観客動員至上主義に陥ってしまうこともある。

観客の減少

また、演者の方は毎年同じ演目を上演するなかで、次第に技を磨く喜びに燃え、少しでもレベルアップしようとして一所懸命だが、観客が同じ筋書きに飽きて、観客数が減ってきたという場合もある。



演者は前よりずっとうまく演じているつもりなのに、観客が減ってくると、張り合いがないということもある。

規模拡大の罠

逆に、活動が評判を呼び、人気が出るに従って、大規模な催しになってしまったが、規模が大きくなれば、費用の心配だけではなく、観客同士のトラブルや、近隣からの苦情なども増え、気苦労が絶えなくなったという話も聞く。立派な催しになったのは誇らしいが、疲れがたまってきた。何よりも、昔からのメンバーは、そうした雑事の処理に追われるようになって、昔は楽しんでた活動本体を人に任せざるを得なくなった。こう



なってくると、昔のような喜びが減ったわりには苦労が増えて、やる気が出てこなくなってしまう。

時代の変化と困難

これとは違って、やっていること自体は楽しいのだが、時代の変化に伴って、同じことが続けられなくなってきたという場合もある。担い手としての子どもが減ったとか、暮らしが変わって必要なものが手に入らないとか、安全基準がきびしくなって昔ながらのやり方が許されなくなったということなどがその理由である。そうしたとき、昔のやり方を自分の代で変えてよいのか、伝統の技を減じるままにしてよいのか、という悩みが出てくる。

本末転倒

こうした悩みをいかに解決するのかという点については、既にい

ろいろな方策を述べてきた。しかし、こうした悩みは、別の面からみれば、目的と手段が入れ替わってしまふことによるのではないかと、中身よりも続けることが目的になる、規模を維持することが目的になる、形を保つことが目的になるというように、楽しみのために行ってきた活動が、本来の目的を見失ってしまうことに問題がある。

苦しみを越えた喜び

もちろん、何をするにも準備や練習が必要であるし、広く世の中の根回しや交渉事も欠かせないから、楽しみだけという活動はない。しかし、苦労を重ねてたどり着いた本番で、やってよかったという感動があり、報われたという瞬間

があるために、苦労がそのままでは終わらず、活動が続ける元気がわいてくるということがある。

山登りの最中は苦しくても、頂上にたどりついて雄大な眺めをみたたん、それまでの苦しさを忘れて、また登りたくなる。やってよかったという感動こそが原動力なのである。とんでもない高い目標を立ててしまったがゆえの苦労も、それが実現できたときには、楽しい思い出である。終わった後の打ち上げの楽しさは別格だ。活動の苦労も、仕事や家族の悩み事も、ともに活動してきた仲間とねぎらい合えば、どこかに飛んでいってしまう。何事にも代えがたい至福のときである。

自分たちの活動をみつめ直す

そこで、疲れたとか飽きてきたといった自覚が出てくるようであれば、一度活動を振り返り、何が大切なのかを考え直すことが必要かもしれない。それには、既に述べた活動の棚おろしが有効な手段となる。その際には、とりわけ活動の本旨・本質とは何かということとをじっくり考えていきたい。いろいろやってきたことには、それなりの理由があり、一見無駄なようにみえるものでも、由来を考えると簡単には切り落とせないことも多い。ここでは、不要なものを切り落とすというよりも、本当に大切なものを続け、かつ楽しむためには何が必要なのかということに思いめぐらせたい。



活動の本旨

そうしたとき、すぐに活動全体を変えることができなくても、活動の本質をなす部分を丁寧によつてみることで出発点ではないか。活動の根幹部分をみつめることで、それがどのように広がっているのかが感じ取れることも多いからだ。たとえば、近隣同士が協力するために始まった祭りだが、盛んになるうちに、勝ち負けが熱気を帯びてしまい、外からの応援団の手前、互いに勝つために必死にがんばるうちに、相手との関係がぎくしゃくしてしまったということもある。そうしたときには、催しの原点に戻って、どうしたら皆で楽しめるのかを考え直すべきであろう。

変わることで生き残る

そうしてみると、形はさまざまに現れているが、その本質となる心の部分をつないでいくという発想が出てくる。形を変えるならそうした観点を踏まえるのが望ましい。長く続いている伝統行事で、何の変化もなく続いているようなものはほとんどない。今の時代からみれば昔の歌や踊りのようにおもしろい込んでいる伝統芸能も、始まった頃には流行の最先端をいく踊りだったり歌だったりするのが普通である。そうした伝統芸能は、時代に応じて、人々の考え方に合わせ、環境の移り変わりに適応しながら、その心をつないできた。活動の心をきちんと押さえておけば、形が少しぐらい変わることを

恐れる必要はないのである。

芯となる考え方の継承

また、全体として隆盛をきわめていても、伝統行事の根幹の部分が忘れ去られてしまうという心配事が出てくることもある。もともとは神事として始まった芸能が盛んになるにつけ、神事としての意味合いが薄れ、誰もその側面に目を向けないということも起こりうる。その場合には、ごく少数の有志だけで神事を続けることで、その心をつないでいくこともある。なぜそれをするのかと聞かれたときに、その意味が伝わればよいと考えれば、立派に伝統は守れる。

新機軸の導入

そのうえで、活動に新たな装いを付け加えていくのが、さらなる喜びをもたらすこともある。毎年同じ演目を上演するだけではなく、新たに創作する部分もつくっておき、創作の喜びをメンバーに感じさせるのもひとつの工夫である。毎年同じ演目を上演することを目的とする活動で、新たな観客を呼び込み、メンバーが創造の喜びを味わうために、毎年違うエピソードが出てくる場面を織り込むことを始めた活動もある。あるいは、若いメンバーに振り付けの一部を任せて、新感覚を導入するのもよいかもしれない。毎年同じことを続けることにやりがいを感じる人もあれば、少しでも新しい工夫が

あることを楽しむ人もいる。両方を巻き込む仕組みがあれば、その活動は、より層の厚いものになるだろう。

裾野を広げる

また、一般人が参加するような催しで、全体のレベルが高くなつて参加への敷居が高くなるようであれば、初心者でも参加しやすい場を用意することが有効かもしれない。活動によっては本番に人数制限があるので、参加できない団体をまとめてひとつの場で参加できるようにしている活動もある。

何事にもよらず、裾野が広がることは、将来への布石になる。展示施設など、日常的に維持・管理されるものでも、ときに応じて特

集展示や、館内や通路の飾り付けに外部の力を借りて新風を吹き込むこともありうる。いつもあるとおもえば、わざわざ人は行かないが、期間限定となると急に人が集まってくるということも、よくあることである。

時期や時間の変更

こうしたちよつとした工夫では乗り越えられない場合もある。時代が変わって、同じような活動が難しくなったという場合、おもい切って活動時期や活動時間を変えてみることも考えてもよい。かつては夜中に行っていたけれども、時代とともに昼間の催しになったということもある。固定日開催と休日開催を検討した結果、学校行事

と重ならない日程を選ぶようにして、子どもを参加させやすくしたといったこともある。産業構造の変化でかつてその時期にしていた理由がなくなったことで、開催時期を変えたという活動もある。時期や時間を変えるときに考えるべきことは多いが、大切なのは、その活動の本旨に沿って、今の時代のニーズをとらえることであろう。

本当の仲間是谁か

まわりの支援者に対して、心を込めて自分たちのおもいを伝えていけば、支援者や観客なども見方を変え、あらためて応援してくれるものである。そのためには、自分たちが大切に行っていること、時代が変わっても変えられないもの、

規模の大小にかかわらず、欠かせないものを自覚することが大切だ。おもい切って一時の興味関心で来てくれる人よりも、分かってくれる人を相手に芸を磨くのもいいだろう。それを可能とする場のしつらえもある。そうしたことを含め、身の丈に合った規模にして楽しむということが必要なのは、既に述べた通りである。

時期が来たら終わる

こうしたことを考えていくと、究極の姿として、時期が来たら解散することを前提に行うという活動があってもよい。その場合にも、活動をやめれば、直ちにともし火が消えるとは限らない。長年の活動を通じて蒔いた種をもとに、ほ



かの団体が活躍する状況になっていることもありうるからだ。あるいは、活動のおかげで、広めたい考え方がすっかり定着し、当たり前になってしまったこともある。今さら無理をしてまで活動しなくてもとおもえば、それはまさに卒業のときといえるだろう。世の中を変えたことを成果として活動を終えるのも、ひとつのあり方である。卒業を前提にする活動というものもありうることに気づく。

仲間内のほめ合い

いずれにせよ、仲間を大切にすることが楽しみを続けることにつながる。忙しくなってくると、どうしても優しい言葉を交わせなくなるが、どこかでメンバー同士が

ほめ合い、励まし合った方が、活動の楽しみが増えてくる。メンバーの役割分担は必要だとしても、運営側のメンバーが、機会をみてちょっと花形をやってみるとか、メンバーが運営ばかりしている活動であれば、たまには自分たちが主役になってみるというのも新鮮ではないか。関係者が皆で楽しめるように、いろいろな工夫を凝らすことが、活動を続ける秘訣になってくる。

交流による気づき

そうして、全国の仲間との交流がある。交流によって、新たな気づきがあり、困ったときに助けももらえる可能性も広がる。しかし何よりも、自分たちの楽しみを人

に話すことによって、その楽しみが倍加するということがある。自分たちが何をやっているのかを人に話しているうちに、そのすばらしさに改めて気づき、感無量になるのである。その姿がまわりの人にも深い感動を与え、次の展開を生んでいく。

楽しむことこそ

何の得にもならないけれど、地域に住む仲間と協力して、物事を成し遂げるのが楽しくて仕方がない。やっているとときには、仕事も心配事も忘れ、同じように感じている仲間といることで、生きる元気があらためてわいてくる。それがなければ日常のなかに埋もれてしまうような町や村が、それがあ

るからこそ、心のよりどころになる。それが地域文化活動である。

さあ、初心に戻って、楽しみましょう。



p87 p85 p82 p80 p78
79 全隠岐牛突き連合会「八朔大会」(撮影：鈴木勝)
四国の秘境 山城・大歩危妖怪村
武蔵野中央公園 紙飛行機を飛ばす会連合会
スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド「スキヤキ・パレード」
合唱団「トワ・エ・モア」(撮影：中田昭)

続けるヒント

地域文化の未来を考える研究会・編

研究メンバー	御厨 貴	（東京大学名誉教授、研究会顧問）
	飯尾 潤	（政策研究大学院大学教授、研究会代表）
	青木 栄一	（東北大学大学院教育学研究科准教授）
	小川 さやか	（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）
	沖本 幸子	（青山学院大学総合文化政策学部教授）
	小岩 秀太郎	（公益社団法人全日本郷土芸能協会理事）
	坂本 誠	（NPO 法人ローカル・グランドデザイン理事）
	長尾 雅信	（新潟大学人文社会科学系准教授）
	鳩澤 歩	（大阪大学大学院経済学研究科教授）
	宮本 直美	（立命館大学文学部教授）
事務局	小島 多恵子	（公益財団法人サントリー文化財団特任研究フェロー）
	柴田 晶子	（公益財団法人サントリー文化財団研究員）

2019 年 9 月 25 日発行 非売品

発行	公益財団法人サントリー文化財団
	大阪市北区堂島 2 丁目 1 番 5 号 サントリーアネックス 9 階
	電話 06-6342-6221
	URL https://www.suntory.co.jp/sfnd/
デザイン	加藤 淳也（PARK INC.）、大久保有彩、しまはらゆうき（挿絵）
編集協力	株式会社 CCC メディアハウス

本提言書は、サントリー文化財団 Web サイトにて、全ページご覧いただけます。